

現代日本語の条件表現

——「と」「たら」「ば」「なら」について——

9 8 7 1 0 4 劉 培榮

目次

序	1
第一章 順接条件の各	11
第一節 「と」について	11
第二節 「たら」について	33
第三節 「ば」について	44
第四節 「なら」について	53
第二章 条件表現の比較・考察	62
第一節 従来の研究について	62
第二節 各形式の比較について	71
第三章 日本語の順接条件表現と中国語の「就」	93

第一節 中国語の条件表現について	93
第二節 「就」について	106
第三節 日本語の順接条件表現と中国語の 「就」について	114
結	131
参考文献	139

序

日本語の条件表現の研究は、近年来、様々の課題で論じられた。なぜ、条件表現の研究が盛んになったのかというと、私見としては、日本語教育に深く関係があると思う。日本語の条件表現に多様な類義表現を有することは、その難点の一つだと思う。これらの類義表現はたまたまにほぼ同じ意味として使われていて、例えば、

雨が降ると	}	体育館でします。
雨が降れば		
雨が降ったら		
雨が降るなら		
のごとくである。)	

この四つの形式の中で、どちらが一番いいか、あるいは、微妙なニュアンスがあるけれども、なんとか言えるそうである。

また、次の例を見てみよう

* 食	べ	る	と	}	作 り ま す 。
* 食	べ	れ	ば		
* 食	べ	た	ら		
	食	べ	る		

「雨 が 降 る」の 場 合 は、四 つ の 形 式 は、す べ て 仮 定 表 現 に 取 れ る。け れ ど も、同 じ 方 法 で ほ か の 仮 定 表 現 文 を 作 り た い と き、な ぜ 「ご 飯 を 食 べ る と、作 り ま す。」や 「ご 飯 を 食 べ た ら、作 り ま す。」な ど が 言 え な い の か、こ れ は 外 国 人 の 日 本 語 学 習 者 か ら 絶 対 出 て く る 問 題 で あ る。

さ ら に、四 つ の 表 現 形 式 を 整 理 し て 行 け ば、そ れ ぞ れ 複 雑 な 意 味 を 持 っ て、似 て い な い、独 自 な 働 き す る 場 合 も あ る。

- ① 家 に 帰 る と 風 呂 に 入 っ た 。
- ② 家 に 帰 れ ば 風 呂 に 入 る 。
- ③ 家 に 帰 っ た ら 風 呂 に 入 る 。
- ④ 「い ま 家 に 帰 り ま す。」

「家 に 帰 る な ら、風 呂 に 入 り な さ い。」

外 国 で 日 本 語 を 教 え る と き、日 本 語 を 使 い こ な し て い る 日 本 人 で も、

その説明に困る例も少なくない。実は、日本語自体がどのようにして微妙なニュアンスで使い分けをしたのか、理論的にはっきりしていないところが多い。国語教育では特に説明しなくともいい問題であっても日本語教育が進んでいくとともに、重要な課題として研究しなければならないのは事実である。

もう一つは、二つの言語に一对一の表現があるとき理解しやすいが、ないときなかなか理解できないのは普通である。ほかの言語については私が何とも言えないが、少なくとも、中国語と対訳するとき、日本語自体が複雑性を持っているだけではなく、「と」「たら」「ば」「なら」に対応する中国語においても、極めて多様な表現がある。

○もしご不満ならお取り替えします。

(如果稍满意,我就可以给你换。)

○もし雨が降ったら,私は外出しないことにします。

(要是下雨,我就不出门了。)

以上のような“要是～、～就～”
 “如果～、～就～”などの中国語の
 条件表現形式を持つ場合もあるし、
 以下のような接続詞を持たなく、文
 のつながりだけで条件表現の働きを
 表す場合もある。

○君と一緒に行けるなら，それは
 好都合だ。

(咱俩能一起去那倒挺好)

○休みの日になったら彼女の家へ
 行ってみよう。

(等休息天找到她家里去吧。)

以上のように、二つの言語が言葉
 だけを入れ替えて簡単に対訳できな
 い場合だったら、両方の言語に対し
 て、それぞれ深く、適切な認識がな
 ければ、うまく使えようとしても、
 とてども無理だと思う。

だから、本研究は、できるだけ外
 国人の日本語学習者にとって分かり
 やすい説明を得るように努力して行
 きたい。

さて、日本語の条件表現はどうい
 うものであるかという問題は、まず、
 従来の研究をみてみよう。

小林賢治によると（注1）、次のような指摘がある。

条件表現は、広く接続表現とされるもののうち、「テ」や「ツツ」などによる事態の単なる時間的連続、あるいは並行的な現象として把握されるものをのぞき、前件と後件とがなんらかの因果関係を持って接続されるものを指す。

しかし、「なんらかの因果関係を持つ」という定義がおそらく外国人の日本語学習者にとっては分かりにくいことだと思う。従来の研究では、通常、条件表現を順接条件と逆説条件に二大別される。その中、「～ても」「～けれども」「～のに」などを逆説条件と考えている。「～から」「～ので」などは順接の確定条件であって、前件と後件が原因・理由の関係がはっきりしているから、「原因・理由文」と考えるのが普通である。順接条件表現は、とくに「～と」「～たら」「～ば」「～なら」を指すのが普通である。

次は具体的な例から考えてみよう。

逆説表現：

○ 風邪を引いても学校へ行きます。

順接表現：

○ 私ならそれを買います。

○ 京都に着くと5分間停車します。

○ 夜になると雪が降った。

○ ご飯を食べたら行きます。

の よう な 表 現 は、

○ 用事がありますので遅刻しました。

○ 高いからやめましょう。

の よう な 「 か ら 」 「 の で 」 を 使 っ て
い る 文 と 同 じ レ ベ ル の 原 因 ・ 理 由 と
考 え る の が 非 常 に 困 難 で は な い の か
と 思 う 。

確 か に 、 順 接 条 件 表 現 の 中 で も 、
次 の 例 の よう な 因 果 関 係 が わ り と 強
い も の も あ る 。

○ ここまで来れば、ひとりで帰れます。

け れ ど も 、 そ の 故 に 、 条 件 表 現 の

全般を「なんらかの因果関係が持つ」という定義付けはやはり少し無理ではないかと思う。

また、益岡隆志氏（1993）（注2）の意見を見てみよう。

ここでは、おおまかではあるが、後件（主節）で表される事態の成立が前件（条件節）で表される事態の成立に依存し、かつ、前件が非現実の事態を表すものを条件表現と規定しておきたい。

この規定の中で、「後件（主節）で表される事態の成立が前件（条件節）で表される事態の成立に依存し」という表述は、誰でも納得できるだろう。問題になるのは「前件が非現実の事態を表す」という表現である。下の順接条件の例を考えてみよう。

○電話をしたら、山田さんがいらっしやらなかった。

○窓を開けると雪国だった。

○先生と話していると、山田さんがきた。

以上の例を見ると、「前件が非現

実の事態を表す」ではないことが明らかになったではないのかと思う。益岡隆志氏自身もこういう事実が存在することを意識したようである。このことを派生的な条件表現と考えておられている（注3）。

また、逆説条件と原因・理由文にも以下のような非現実の事態に当てはまらない用例がある。

○ちゃんと説明したのになぜ分からないの。

○ 風邪を引いたので学校を休みます。

態の範囲あべ隆現しの
 事表現で、件仮定た
 の表現、検は、条件
 実条件どこにで、条
 現条件どこにで、条
 非て、からた察度、
 うすたらかああるの
 よをれたことを者あ
 の文さいと。筆はい
 こい。この意見とい
 、ない外たいう。意
 し、なら除いたろの
 もたらはいとあ氏「
 当かはかであ岡、
 躊はかで岡、
 躊はかで岡、
 るはかで岡、
 きはかで岡、
 志はかで岡、
 をはかで岡、
 たはかで岡、
 で

だから、本研究では、条件表現は前件と後件の二つの事柄のうち、前

件は後件の前提となるものを条件表現と考えるつもりである。

そして、サブタイトルで分かるように、この研究は条件表現のすべてを取り扱うわけではなく、その中の順接条件に相当する一部だけ考察していきたいと思う。

なぜ、順接条件と言うと、「～と」「～たら」「～なら」「～ば」だけを取るのかは、簡単に言えばこの四つの表現形式が、順接条件表現の代表的なものであるし、互いに絡むところもあり、使い分けの難しいところもあるから。そして、これも従来の研究を踏まえたことである。さらに前に書いてあるように、広い意味での条件表現の中で逆接条件の意味をしている文と因果・理由の意味をしている文は、この順接条件の文とは、意味的に別々の分野であることが分かる。一緒に比べながら説明する必要がないと考えられる。もし必要とされたら、その各分野の内部のニュアンスを明らかにさせたほうがもっと役に立つと思う。

以前、筆者は原因・理由文について不十分な考察があったが（注4）、今後の課題として、逆説条件文についても研究するつもりである。

本研究の用例については、外国人が、日本社会に対して分からないところが多いという実情があるので、筆者はできるだけ、内容の分かりやすい文を採用した。その中に、テレビや、ラジオや、人間の日常会話などから取った用例もあれば、参考文献から取った用例もあるので、出典を一々付けることができなかった。ここで、各著者にお詫びを申し上げたい。

第一章 順接条件の各論

第一節 「と」について

まず、「と」の先行研究についてまとめよう。

国立国語研究所「現代語の助詞・助動詞—用法と実例—」(注5)によると、「と」の用法には大別して、次のような用法があるとされている。

1、二つの動作・作用の時間的共存・先後の関係

イ、同時

○ 起き出すと、母はもう食事を済まして父を送り出したあとであった。

ロ、継起

○ 新橋駅を出ると、彼女は直ぐ神田を目指した。

2、因果関係をもつ二つの動作・作用を結びつける

イ、きっかけ

○ ゆりがそっと目を放すと、待ちうけていたようにミチ子がそばから口をはさんだ。

ロ、習慣・反覆的事象

○ 生後七八か月以後になると、母乳の分泌の減ることが多いのですが、...

ハ、仮定の順接条件

○ この銀行の正味の資産は60億ドル以上といわれる。日本の金になおすと2兆2千億円ほどになる。

○ 技術的な面を考えると、そうも言えそうであった。

この国立国語研究所の考察によれば、「と」の意味・用法についてだいたいのことが分かる。けれども、外国人に教えるとき、まだ、いくぶんか理解しにくいところがあると思う。だから、ここでは、先行研究を念頭に置いて、自分の意見を加えながら、述べていこうと思う。

一、前件のことが行われると、後件の事柄が近接的に続いて起

こ る こ と を 表 す

この用法は「と」の各意味・用法の中で最も基本的な意味なので、まずここから考察してみよう。

(一) 継起の「と」

1、彼は本を手にとると急に読み始めた。

2、私はその音を聞くとすぐ外へ出た。

3、私は家に帰ると、すぐ新聞を読んだ。

上の例を通してみると、継起をあらわす場合は前件と後件が同じ主語であり、そして、前件も後件もともに何か動作を行われなければならぬのが特徴である。すなわち、前件の動作を行われたあとの後件の内容は、動作という動的なものである。物事の存在とか状態といった静的なものではないのである。続いて起こった動作だから、文末は過去形が普通である。

(二) 相継の「と」

4、その質問をすると招待した人はこう答えた。

5、私が声をかけると逃げてしまったんです。

6、お爺さんが笛を吹くと小鳥が集まってきた

この相継の「と」は継起の「と」とよく似ている。両方とも、前件は人間の動作であり、後件はその動作のもとで行われた動的なものである。大きな違いは、継起において前件と後件の主語が同じであるが、相継において前件と後件の主語が違う。そして、相継の場合は、前件が後件に働きかけをしている。例えば、例5のように、私が声をかけることがなければ、逃げてしまうことがないかもしれないというきっかけの意味が潜んでいる。時間的言えば、継起のほうが、緊密性がもっと強い。

(三) 自発の「と」

7、黙り込む母の顔を見ると、小池さんの目から思わず涙がこぼれる。

8、月を見ていると故郷の父母のことが思い出された。

9、あの時のことを思い出すと

ひとりでに笑えてくる。

自発文もやはり「継起」と「相継」と同じように前件と後件が緊密性を有するものである。ただし、自発文において、前件は同じ人間の動作を表す他動詞でありながらも、後件は自動詞か、動詞の自発形でなければならない。後件に積極的な動作が現われていない。前件のことが行われたら、ほぼ同時に、無意識的に思わす後件のことが生じることである。事柄は繰り返すことや習慣的なことの場合、後件が現在形で、一回だけの過去のことがなら文末は過去形で構わない。

二、発見の意味を表す

発見の意味を表すと言っても、やはり、「と」の近接性を示す基本的な意味から完全に離れることではない。一の用法と比べると、後件は動物的なものである。状態を表すのが特徴である。そして、動作の前後関係より、今まで未経験なことを発見した気持ちを伝えるのが重点に置

かれたと考えられる。だから、ここで、ひとつの項目を設けて論じてみたい。

10、トンネルを抜けると雪国であつた。

11、窓を開けると、外は粉雪がまっている。

12、花子がかびんを持つと、かびんが割れていた。

13、二人が歩いて停車場に行つて見ると汽車はもう着いていた。

14、花子が部屋へ行くと、いい匂いがした。

15、教室に行くと授業が始まっていました。

16、右のほうへ入っていくと、ぶらんこがあつた。

17、健ちゃんがガラス戸にかぎをかけようとする、さっきのかえるが、まだ、つくばっています。

18、おや、こうやって持ってみると、どれもこれもみんなひやくしょうの手だ。

以上の例をなぜ「発見」というのか、まず、豊田豊子氏の意見を見よう。(注6)

「ここで発見とは、あるもの・ことがある状況にあることを見出すことである。しかし、見出す意味を広げ、あるにおい・音などを感じとることまで及ぶと、“自覚”という過程を経て発見されるというもう一つの形態をとることになる。その場合、後項は必ずしもあるものごとの状態を述べる形ではなくなる。」

さらに、豊田豊子氏に次のような指摘もある。(注7)

「このかたちの文では、ふつう前項の主語Aは人である。後項の主語Bはひと・もの・こと何でもいい。また、文末は過去形の場合もあり、現在形の場合もある。そして、現在形でも過去形でも意味にかわりがない場合もある。」

豊田豊子氏の“自覚”という過程を経て発見されるという形態は、例

の 14 である。文末は過去形の場合には例の 10、12、13、14、15、16などを指しているが、現在形の場合には例の 11、17、18を指している。それぞれの文をみて、確かに文末は現在形にしろ過去形にしろ、意味に変わりがない場合もある。すなわち、発見の働きする「と」の後件は現在形と過去形の二種類がある。けれども、同じ文について、現在形と過去形を自由に変えることはできない。

もし、上の現在形で終わる文を過去形に変え、過去形で終わる文を現在形に変えたとすると、次の A 群と B 群になる。

A 群：

- 1、窓を開けると、外は粉雪がまっていた。
- 2、健ちゃんがガラス戸にかぎをかけようとする、さっきのかえるが、まだ、つくばっていました。
- 3、おや、こうやって持ってみると、どれもこれもみんなひゃくしょうの手だった。

B 群 :

- 1、トンネルを抜けると雪国である。
- 2、花子が花瓶を持つと、花瓶が割れている。
- 3、二人が歩いて停車場に行つて見ると汽車はもう着いている。
- 4、花子が部屋へ行くと、いい匂いがする。
- 5、教室に行くと授業が始まっている。
- 6、右のほうへ入つていくと、ぶらんこがある。

A 群の場合は、現在形を過去形に変えても発見の気持ち伝えるには問題がない。むしろ、発見の意味がもっと強くなつた。問題になるのは B 群である。現在形に変わると、発見の意味がほとんど失つてしまう場合がある。例えば B 群の 1、4、6 である。発見するよりは、むしろ誰かが「国境の長いトンネルを抜けると、向こうは雪国である」、「右のほうへ入つていくと、ぶらんこが存

在している」という事実を言うような感じである。あるいは、4のような繰り返して体験したことを述べたことである。

なぜB群の1、4、6は現在形に変えると発見の意味が失われたのかという、やはり助動詞「た」に発見、変化の意味をしている働きがあることと考える。

発見の意味を表す例文を分析していくと、後件には継続、状態、存在、判断と例14のような自覚形態であることがわかる。私見としては、この五つの形態の中で後件に継続、状態の場合は過去でも、現在でも発見の意味を表す。存在、判断、自覚の場合は例18のように前件に「～てみる」などの発見を導き出す形がなければ、「た」でないと、発見の意味を表すことができない。

上の継起を表す文と発見を表す文は一見よく似ているようであるが、実は後件をよく見ると、その違いはすぐ分かれると思う。発見の意味をしっている「と」は、豊田豊子氏に指摘

されたとおりである。（注 8）

「前件と後件の主語が異なり、後件は前件に関係なくある状態にあるか、ある作用が起こっていないなければならない。」

一方、継起の意味をしている「と」は前件と後件が同じ主語だけではなく、後件に何か動作あるいは行動を行わなければいけない。

三、仕組を表す

19、5秒経過すると自動的に再試行します。

20、ブザーが鳴るとドアは自動開閉します。

21、充電が始まると、青いランプがつきます。

22、蛇口に手を近づけると自動的に水が出ます。

23、返却期日に遅れると一冊一日につき1点延滞チェックがつきます。

24、30点になると10日間の貸出停止になります。

25、バッテリーが切れると、保存

して いない 情報 は 失 わ れ ま
す。

この 仕 組 み の 前 提 を 表 す 「 と 」 は 、
前 件 、 後 件 と も に 発 話 の 時 点 の 人 間
の 意 識 に 関 係 が な く 、 シ ス テ ム が 作
ら れ た と き 、 す で に 設 定 さ れ た こ と
を 客 観 的 に 叙 述 し た こ と で あ る 。 主
に 説 明 や 予 告 に 用 い る 。 危 険 や 障 碍
を 避 け る た め に 使 う 。 形 式 か ら 見 れ
ば 、 後 件 に 話 し 手 の 心 理 的 な ム ー ド
の 表 現 が な く 、 現 在 形 で 終 わ る の が
ほ と ん ど で あ る 。 個 別 、 具 体 的 に 説
明 す る と き は 「 た ら 」 を 用 い た 場 合
も あ る け れ ど も 、 一 般 的 な 事 実 と し
て 使 わ れ る と き に 、 「 た ら 」 「 ば 」
「 な ら 」 と 置 き 換 え る こ と が で き な
い。

四、恒常条件を表す

恒常条件というのは、個別なこと、
一回きりのことではなく、時間の概
念を超えて、何度もくりかえして経
験したことを表すのである。具体的
に以下のように分けることができる。

(一) 真理の「と」

26、おたまじゃくしが大きくなると蛙になります。

27、春になると暖かくなります。

28、病原性のある菌から取り出したDNAを病原性のない菌に注入してやると、病原性のない菌が病原性のある菌に転換することを示して、DNAが形質を伝える因子（すなわち遺伝子）であることを証明した。

この真理の「と」は、まず、人間の繰り返し経験したことである。そして、後件の結論を得たのは、人間の思考のプロセスによるものではなく、客観的に存在する事象をそのまま反映するものである。すなわち、前件と後件とともに人為的な関係がなく、まったく客観的、自然的に生じた変化である。

(二) 習慣・反復の「と」

29、試験が近づくと忙しくなる。

30、彼は午後になると熱が出る。

31、中国では、冬になると、近

くの湖へ行ってスケートを
していました。

32、小学生の時、休みになると、
いつも田舎のお爺さんのと
ころで過ごしていた。

上の例の共通な特徴としては、今
まで何度も繰り返した事実を叙述し
た表現である。(一)と違うのは、
自然界において必然的に発生する変
化ではなく、人為的なものが入って
いるか、あるいは、例30のような一
般な客観規律に反するものである。
例29、30は、いままであった、そし
て今からもおそらく繰り返して現わ
れることをいうので、文末は現在形
である。反復の事象を表す。これに
対して、例31、32は、過去の習慣を
表したもののなので、文末が過去形
である。

(三) 一般規律の「と」

33、決めないといけないぞ。

34、見ないと損するよ。

35、早く出ないと間に合わない。

36、うっかりすると失敗する。

37、あなたのような美人が結婚

していないと、かえっておかしいですね。

38、北側に窓があると、冬は寒い。

39、お母さんがいると、安心します。

上の例は、一見すると仮定の意味か、あるいは因果・理由の関係をまかず浮かんで来るかもしれない。よく考えると、それよりは、いままで、何度も体験した事実、あるいは一般の常識や経験から出した結論の意味合いがもっと強いのではないかと思う。例えば例35の場合は、「うちが駅から遠いので、いつも早く出ない」という通常のこととを言うとき、恒常条件と考えなければならぬ。もし、「今日は道が込んでいるから、早く出ないと間に合わない」という具体的なこと、一回だけのことを言うなら、仮定条件の意味が取りやすいと思う。例38、39は、因果・理由の意味を完全に抹殺することができない。けれども、「この部屋は北側に窓があるから、冬が

寒い」という表現と同じレベルの因果・理由の意味ではない。「一般的に言えば、北側に窓があると冬は寒い」という、普遍的なことを言う表現が考えやすいのではないかと思う。そして、前件は何か状態や、動作の行われることを決まった条件として設定されて、後件に働きかけて、影響の及ぶのが特徴である。すなわち、前件の条件を満たすと後件の結果になるのは一般的なことである。こういう判断を出すのは自然界の事象をありのまま反映するものではなく、あくまでも人間の一般的な認識のプロセス（特に思考や推論・判断）によるものである。だから、真理の「と」と違って、はずれることがあるかもしれない。それでいても、前件と後件の一体性には影響がなく、依然として強く存在する。さらに、恒常の条件、一般的な事実をあらわすので、後件は現在形にこだわるようである。

五、前置きを表す

40、問題点を一例だけ挙げると、
特殊法人が情報公開の対象
から省かれていることであ
ろう。

41、私の経験で言うところ、そうい
う傾向が顕著に見られるよ
うになったのは・・・八〇年
代以降のことです。

42、統計によると、日本の父親
は家庭で家族と向き合う時
間が一日十七分しかないとい
う。

43、豊の時代で言うところ、森安な
んてそれは素晴らしい投手
だったよね。

44、火星は、太陽から見ると地
球の次にある惑星である。

45、田中さんと比べると、山田
さんのほうが背が高いよう
です。

上の各例文が共通な特徴として
は、後件の結論あるいは内容は前件
のもとによるものである。もっと分
かりやすく言うところ、前件は推論、比
較の基準、あるいは後件の結論、説

明を得るための根拠、出典である。後件はその条件や立場のもとで得た認識や結論、あるいは前件の内容か、説明である。前件と後件は必然的な関係ではなく、特別の条件のもとで特別に判断されて、特別な結論を得たものである。形から言えば、「～と聞くと」「～で言うと」「～によると」「～から見ると」など、根拠、出典を示す表現が前件に現れるのが特徴である。後件は内容を表すものが多い。「と」で表す前置きは、「～についていう」の意味を持たない。

六、仮定条件を表す

45、毎日二時間だと週に十二時間勉強することになりますね。

46、また会えるといいね。

47、明日いいお天気だと行きます。

仮定の順接条件というのは前件にある未成立の事柄を想定して、その条件から導かれる順当な帰結として後件に述べる事柄が成立するという

関係を表す。

先行研究では「と」に仮定性があるかないかについて、一致する結論がないようである。(注9)なぜこの問題が生じたのか、今までの考察から見れば、「と」形式は時間を超越した恒常的事態、真実・真理を表す特徴があるから、一つの文についで場面を特に設定しなければ、仮定条件と恒常条件の両方が考えられる場合が多いことである。恒常条件の例33のごとくである。例えば、バレーボール試合の最後のセットに入る時、監督が過去の経験でこのセットが大事なところで、「決めないといけないぞ」と言うときは、恒常条件と考えるのが普通であろうが、「いま決めないといけないぞ」としたら、これからのことなので仮定条件と考えやすい。

さて、「と」で表している恒常条件と仮定条件をどう区別すればいいであろうか。江田すみれ氏に次のような意見がある。(注10)

「仮定性があるかないかの基

準としては、「もし」「仮に」という副詞と共起できること、裏の意味が考え得ること、の2点を満たすものとした。」

ここまでの考察から見れば、「と」形式で表している仮定条件は、「もし」「仮に」が直接文の中に現われているのが少ない。むしろ「いま」、「また」、「明日」など、現在、未来を示す時間副詞と共起すると考えた方がいいだろうか。

七、時を表す

ここで、時を表す用法というのは、特に「と」と「とき」を書き換えることを指す。

48、授業をしていると、一人の子の頭の上に木の実が落ちてきた。

49、大風は朝になるともう止んでいった。

50、先生と話していると山田さんがきた。

51、玉手箱のふたを開けると、煙がでた。

豊田豊子氏の意見によれば（注 1 1）、例 50 の場合では「と」と「とき」をそのまま書き換えても、ほとんど意味に変わりはない。例 51 の場合では「と」は「～たとき（時）」に置き換えられて、大体同じ意味を表す。すなわち、「と」は「～たとき」になる。

管見としては「～している」との場合には「と」と「とき」をそのまま書き換えても意味が変わらない。なぜなのかというと、現在進行形は動作が行われている途中のことを表して、その間に、後件のことが生じた。「と」と「とき」はどちらも同じ時間範囲を示すものであつて、時間的には「～たとき」になる理由については、「と」が動詞の過去形からの接続はないうという意見が従来の研究で多く指摘されてきた。時を表す「と」の用例を集めてみると、文末はだいたいの過去形であることが分かった。なぜ、こういう特徴があるのか、筆者の意見としては、「と」に近接性

と反復性を有するからと考える。例えば「私が休むと彼が来る。」「彼はご飯をするとよく喋る。」など文末が現代形の場合は相繼のことや習慣・反復の事象を表すので、「とき」の意味が取りにくい。これに対して、「とき」の意味を示す「と」はだいたいの具体的、個別的なことがらを表すのが非常に印象的である。だから、後件に過去形が来るのが普通である。

以上で見てきたように、「と」はある条件のもとで瞬間的・近接的に以下の事態が成立することを述べるものや真理的、習慣・反復など恒常的な事象を表すのが、最も重要な役割である。それ以外に、発見、仕組、仮定、前置き、時などを表す働きも持つことがわかった。「と」の根本的な意味は前件と後件が客観的、心理的に近い関係を表わすものであるが、恒常条件も発見の意味の「と」も仕組の「と」もこの根本的な意味に関連すると思われる。そして、具体的文について継起、相繼を表す

のか、真理、反復のことを表すのか、はっきり分けることができないこともある。いずれの場合も事実のことを言うのが中心である。だから、仮定の意味と原因・理由を表す用法があるけれども、その特徴が弱いか、あるいは制限性の強いものである。

語法を説明している諸家に、「と」で接続された文は後件に「～しよう」「～しなさい」「～してください」のような意志、勧誘、命令、依頼などの表現が来ないという指摘があった。(注12)けれども、実際の調査の中で次のような揺れの見られた文が現われた。今後の研究のために、ここで記す。

- お腹が痛くなると、すぐ病院に来てください。
- ××さんがお出ですと、受付まで越してください。

第二節 「たら」について

接続助詞「たら」は、学校文法の中で過去・完了の助動詞「た」の仮

定形と定義されている。現代日本語において、「たら」は条件表現の中で文末の制限がないので、かなり活用される形式であるように考えられる。横林宙也・下村彰子氏の考察によって、以下の用法が分かっている。

(注 1 3)

a、前件の条件が成立した時点にたつて後件を述べる「仮定条件」。後件には話し手の希望、意志、命令、推量などが表れる。

○ あしたの朝早く起きられたらジョギングをしよう。

b、理由・きっかけを表す。文末は過去形。

○ 母の日に贈り物をしたら、母はとても喜んだ。

c、「その時」または「その後で」という意味を表す。前件と後件にはの b ような因果関係はない。

○ 父が帰ってきたら相談しよう。

d、ある行動の結果分かったこと

を表す「発見」。後件は話し手の意志とは無関係な事実が続く。文末は過去形。

○海へ泳ぎに行ったら、波が高く遊泳禁止だった。

筆者の意見としては、「たら」の根本的な働きは前件の動作・作用が実現された時点に、後件が導かれるところである。すなわち、非現実の事柄（未然条件）を実現したこととして用いられるのと、実現したこと（已然条件）を条件として用いられるのと二つに分ける。

まず、未然条件のほうを見てみよう。

一、時の「たら」

- 1、頂上に着いたらお昼にしよう。
- 2、落ちて着いたら、手紙をください。
- 3、中国語が上手になったら、いっしょに中国へ旅行に行きましょう。

4、帰る日がきまったら、また
お便りします。

時を表す「たら」というのは、前
件が実現されるかどうかは、もう問
題ではない。主にそのことが成立し
た時点のことを強調に置かれる。す
なわち、前提となることは今の時点
ではまだ未成立のことであるけれど
も、将来のある時点に必ず実現され
る確信を持っているか、あるいは時
間の経過によって、必ずそうなるこ
とである。例えば、例1の場合は「頂
上に着ければお昼にする、頂上に着
かなければお昼にしない。」という
意味ではない。「頂上についたとき
(着いたあと)、お昼にする。」と
いう意味である。この場合の「たら」
は、「とき」を意味する同時に、前
後関係も表す。

二、仮定条件の「たら」

5、雨が降ったら早く帰ってき
なさい。

6、凍結したら、凍った個所に
タオルをかぶせ、ぬるま湯

を ゆ っ く り か け る 。

7、 値 段 が 安 か っ た ら 、 買 い ま
し ょ う 。

8、 も し こ の 宝 く じ が 当 た っ た
ら 、 新 車 を 買 い た い 。

「たら」で表す仮定条件は、主として未成立の事柄を成立した時点についての判断や意見を述べるものである。前件の条件があるかないかが分からないが、かりにそういう事が生じたら、後件のことが行われる、あるいは行われてほしいという意味である。「どうしたら、いいでしょう。」のような前件に疑問詞を持つときは、最も強い仮定の意味を表す。

次は、已然条件のほうを見てみよう。

一、 結 果 の 「 た ら 」

9、 電 話 し た ら 誰 も 出 な い ん で
す 。

10、 昨 日 訪 ね た ら 居 な か っ た 。

11、 読 ん だ ら 分 か っ た 。

12、 買 い 物 に 行 っ た ら 、 ち ょ う

ど二つ残っていた。

結果を表す「たら」の前件は意識的な動作、後件はその意識的な動作の結果である。前件と後件は必然なものと結びつきがない。前件と後件とともによく似てい実である。発見の用法の場合には後件がなく、予想外の状態を表すものである。例えば、「外に出たら、雨が降っている。」の文は、外に出る目的は何かを、意外にも目的と直接関係のない雨が降ったことを表すのである。結果の期待は、期待に反するものもある。例9の場合、電話をかけるのが一般的である。出ない人か、出たか、結果

二、発見の「たら」

13、部長の部屋に入ったら、社長が来ていました。

14、私が行って見たら、もうみんな集まっていた。

15、日本語がもう問題がないつもりで、日本人と話したら、やはり聞き取れないものが多かった。

16、急いでいったら、ちょうど急行列車がでたあとだった。

鈴木重幸氏が「日本語文法形態論」の中で（注14）こういう意見を述べられた。

「「…すると」には、「…したら」と同様、発見の条件や、時間的な状況を表す用法もある。」

確かに「たら」と「と」は発見を表す用法において、意味上も形式上も、大きな違いがなく、ほぼ一緒である。けれども、「と」で表す発見と「たら」で表す発見はまったく同じニュアンス、同じ心理であろうか。

次の例を見てみよう。

A 1 外へ出ると、雨が降っている。

A 2 外へ出たら、雨が降っている。

B 1 トンネルを抜けると、雪国であつた。

B 2 トンネルを抜けたら、雪国であつた。

第一節で述べたように、「と」で表す文は前後の一体性が強い。A 1、B 1 の場合は、ただ「外へ出たとき」、「トンネルを抜けたとき」の事実や状態を述べた印象が強い。A 2 の場合は、「外へ出て、何かをしたいが、けれども、雨が降っている」という予想外のことに会って、遭遇した気持ちが浮かんでいる。また、B 2 の場合は、「トンネルを抜けて、温かいところだと期待したのに、まさか、雪国であるのがぜんぜん考えなかつた」という意外の気持ちも考えられる。「と」にしろ、「たら」にしろ、両方とも発見の意味を表すので、両方とも偶然性、意外性を有するのが認められたが、ただし、「たら」で表す発見は「と」で表す発見よ

り、さらに意外性や、偶然の意味が強いではないかと思われる。

もうひとつ言っておきたいのは、発見の意味を表す文の前件は動作・行動が行われるとき、あるいは行われたあとに、後件の状態を発見したものである。だから、完了の意味をしていない「ば」や「なら」で表すことができない。

三、因果関係の「たら」

17、けちと言ったら、殴られた。

18、一所懸命に勉強したら、いい成績を取れた。

19、行かないと言ったら行かないよ。

この因果関係の文の意味は、分類の題のとおりで、さらに贅言する必要もない。後件も一と同じように、結果を表すものである。ただし、ここでは前後件の因果関係が強いのに対して、一の方が、条件—結果の意味合いが強い。

四、反事実条件の「たら」

20、もし法律が許したら、お前は妻を殺したかもしれないな？

21、お母さんも生きていたらきっと同じことを言うよ。

22、戦争のあとで道をもっと広くしておいたら、町はもっとよくなっていた。

23、もしあなたが少し早めに知らせてくれたら、私は昨日来ましたのに。

反事実条件というのは、前件で示された条件は実現に起こっていないことである。現実には起こっていること、あるいは存在することはちょうどそれに反するものである。そして、未来のいつかに実現される可能性もないことである。前件から見れば、現実に存在するものではないから、未然条件に属するようである。けれども、文の意味から考えると、過去の現実に反していることを示すから、やはり、已然条件に入れた方がいいではないかと思う。

以上のことをまとめると、「たら」

のどの用法にもかかわらず、四つの表現形式の中で文末制限がいちばん少なく、もっとも自由な形式である。そして、未然のことにしろ、已然のことにしろ、「たら」の根本的な意味は、後件の行動や事実がすべからず前件が実現された時点にたつものである。前に述べてように、発見の条件においては、「と」より偶然性、意外性が強いだけではなく、仮定の意味においても、ほかの形式より偶然性、意外性も強い。

次の用例が、日本人にとっておそろしくとても馴染みがあるものだと思う。

○製品にお気づきの点がございましたら、～お客様相談室まで送りください。

筆者の調べによつては同じ意味の文に「たら」しかかわれていないおそろしく、どのメーカーでも自分の製品に問題があるのは普通のことではなく、ごくまれなことであるという主旨を持って、宣伝しているだろう。

第三節 「ば」について

まず、先行研究について見てみよう。

国立国語研究所報告では、次のような用法が挙げられている。(注15)

- 1、未成立の事がらを成立したものと仮定し、順当な結果に対する条件とする。(仮定の順説条件。)

○馬上の子供たちも表面は朗らかそうにキャッキャッと騒いでいるが、一人々々になれば正広君と同じように、悲しい事情のある薄幸な子に違いない。

- 2、前おき。(立言の根拠や内容の前ぶれ。)

○運転手の視界についていえば注意して設計すれば両者とも大差はない。

- 3、きっかけ・根拠・理由などとなる動作・作用を、後件に対する条件として提示する。(既定の順説条件。)

○ 門を出ながら振り返れば、木立の隙間を透して、各病棟の灯が何かをさゝやくように静かにゆれている。

4、ある条件が具われば、いつでもある順当な結果が生ずるというような場合の条件を示す。(習慣、反復的事象など。)

○ 国際結婚をすれば、一人は他の一人の国の思想や習慣に従って生活しなければならないと思う。

5、共存事実を列敘する。

○ しかし、子供にとっての「母の胸」ほど、甘美な憩いの場所はない。こゝには裏切られる心配もなければ、追立てられる不安もなかった。

ここでは筆者が次のように分類・考察して行きたい。

一、恒常条件

1、雨が降れば、道がぬれる。

2、命長ければ恥多し。

3、早期に発見できればほとんど直ります。

4、人口急増を放置すれば、貧困と多産多死のサイクルは止まらない。

5、春になれば、暖かくなる。

ここで恒常条件というのは、まず、これまでの経験をまとめたものである。そして、これからも前件に変わりのないかぎり、同じことも繰り返して生じる意味を表す。すなわち、その条件のもとにいつもあるいは一般的にある事柄の起こることを示す。真理に近いものである。諺によく用いられる。「と」で表した恒常条件と比べると、論理性が強く、緊密性が弱い。具体的にいえば、「と」のほうが後件に変化を表すことが多く、そして、前件を満たしたら、すぐ後件が発生するニュアンスがある。「ば」のほうは、後件が生じるのが必然のことと考えるけれども、すぐ生じる意味は文の中で分からない。

二、仮定条件

6、来週そちらへ行く日が決まれば、お電話します。

7、もし、相手がお辞儀をすれば、私もする。

8、明日もし雨が降れば、私は行かない。

9、間違いがあれば、訂正しなさい。

前件は、まだ未来、未知のことで、かりに前件が実現されるとしたら、後件が行う予定である。本当にそういうことが発生するかしないかは分からない。すなわち、前件が実現されていない場合は、後件のこともないという意味がある。前件に重点をおかれ、前件次第のニュアンスを考えやすい。

三、必要唯一条件（十分な条件）

10、これを埋めれば文章が出来上がるものだ。

11、いいか悪いかは試しさえすれば分かります。

12、電話をかけてくれさえすれ

ば すぐ 迎 え に 行 く。

13、手術さえすれば、病気は治
 せます。

この必要唯一条件と言うのは、ま
 ず、後件は動かさないこととして設
 定されて、後件を実現するために、
 満たさなければならぬ条件を前件
 に提出するものである。例えば例13
 の場合は、その意味はこう解釈でき
 ると思う。「手術して初めて病気は
 治せます。手術しなければ治せない。
 」つまり、「薬を飲んで、注射して
 も、あるいは手術以外の方法
 はなんでも役に立たない」と言う意
 味である。この必要唯一条件は四つ
 の表現形式の中で「ば」の特有なも
 のであり、ほかの表現形式と書きか
 えることができないものである。基
 本的には「～さえ～ば～」の形で現
 れる。

四、確定条件

ここで確定条件というのは、前件
 が実現できるかどうかはすでに問題
 ではない。前件のことが実現された

時点にたって、後件の内容を導き出すものである。意味から見れば、きっかけと因果関係に二つ分けることができる。

(一) きっかけ

14、見れば一人の男が立っている。

15、それを思えば、こんな苦勞は何でもない。

16、見上げれば、みんな富豪の家です。

17、よく考えれば、簡単のことだった。

このきっかけの文は、前件によって、後件の認識・結論を得た、あるいは現実世界の事象を反映したものである。前件は必ずしも目的のはっきりしている意識的な動作ではない。

(二) 因果関係

18、ここまでくれば、一人で帰れます。

19、学校の支持があれば、彼は邪魔だてできないよ。

20、このぐらいできれば、もう

合格するのが大丈夫です。

上の例文を因果関係と考えるときは、場面の要因を考えなければいけないと思う。例えば、20の文は、先生が採点した答案用紙を見ながら言ったことにしたら、因果関係の意味に取れる。もし、先生がある練習問題集を学生に紹介するとき言ったことにしたら、むしろ、仮定の意味が強いと思われる。例18、19も同じように、場面によって、因果関係以外の意味が考えられるかもしれない。

五、反事実条件

21、パパもここに居ればいいのに。

22、あなたが来なければ、どうなっていただろう。

23、あなたがもしもうすこし早く来れば、よくなったのに。

24、お金が十分あれば、自動車を買うのだが。

田窪行則氏に次のような意見があった。(注16)

「日本語では、反事実性を示

すような明示的、文法形式はないが、従来から、反事実的な解釈を受けやすい構文が指摘されている。」

今回の調査では、それとほぼ同じ事実を受けた。ここで「ば」で表す反事実条件は「たら」で示すものと同じく、前件では現実に反することを持ち出して、後件はもしそうなるかと仮定して述べたものであると考える。どうしても特徴を求めたいなら、後件には「のに」、「が」、「だろう」など、逆接の意味を表すものと推量の表現で終わる場合が多い。そして、現実に反するものなので、「たら」で表す場合と、「ば」で表す場合は前件においてどちらも過去のことで、意味上の違いはほとんど感じられない。ただし、「ば」は「たら」よりやや書き言葉的、改まった言い方と考えられる。また、場合によって、「たら」のほうは残念な気持ちが強く、「ば」のほうは事実の反対感が強いということが感じられることもある。

六、前置き

25、今朝のニュースによれば、
またドルが下がったそう
です。

26、簡単に言えば、時代が変化
したということだ。

27、新聞によれば、景気はよく
なり始めたらしい。

28、花とえば、桜です。

「ば」で表された前置きと、「と」
で表された前置きはほとんど同じ意
味を示すものである。「ば」の場
合は、情報源を示し、内容の前ぶれ、
出典を導き、話題の提示など、「と」
と共通な用法を有するとともに、
「と」にない動作の対象や範囲を示
す用法もある。このことについては、
第三章でまた述べる。

「ば」とほかの三つの形式と比べ
て、顕著な特徴は慣用形が多いこと
であると考えられる。「～さえ～ば
～」や「～ば～ほど～」や「～ば～
よい」や「～なければならぬ」や
「～ねばならぬ」や「～といえ～」

（「といえは」の前後は同じ言葉——淋しいといえは淋しい）などが数多く数えられる。さらに、先行研究で指摘された「共存事実を列叙する」用法も「～も～は～も～」の慣用形と考えられる。特に中国語が母国語の人を対象になるとき、慣用形の方法で教えるのは教える方にとっても、教えられた方にとっても理解しやすく、便利な方法の一つである。

「ば」の各用法を総合してみれば、後件に感情的なものが来にくく、客観的な事実を述べるのが普通である。そして、「ば」で表す条件文の重点は前件にあることが多い。論理性、因果性が強い。客観的な事実を表す場合はほとんど「と」と書き換えることができる。

第四節 「なら」について

「なら」に関する研究は、ほかの形式より遅れているようである。いまだに分からないところが多い。横林宙也・下村彰子氏の考察によれ

ば、以下の用法がある。(注17)

a 「もし～だったら」の意味を表す。名詞、ナ形容詞につくことが多い〔仮定条件〕。

○ なっとう以外なら日本の食べ物はなんでも好きです。

b 動詞について、ある事柄が起こる、または起こっていることを認め、それに対する話し手の意志、意見を述べる。「もし～(するつもり)だったら、私はあなたに今、次のような助言をする」という意味。

○ 長距離電話をかけるなら夜八時以降は安くなりますよ。

c 名詞に続いて、話題提示を表す。

○ そのことならもういいんです。

筆者は、「なら」は断定(指定)の助動詞「だ」の仮定形であるという根本的な意味を従って、主として、当然の問題を仮定条件として、この物事について自分の意見や結論や判断などを出す表現と考える。大きく分けて、以下の用法がある。

一、相手の話、情報を受けて、それについて話し手の主観的な意識を述べる。

1、A：私は日本へ行こうと思っていますが、いつ頃がいいでしょうか。

B：日本へ行くなら、四月の初めがいいですよ。

2、A：お昼は郵便局へ行きます。

B：郵便局へ行くなら、ついでにこの手紙を出してください。

3、A：明日雨が降るそうです。

B：雨が降るなら、やめにしましょう。

4、A：パソコンが買いたいのですが。

B：パソコンを買うなら、いい店を教えてあげますよ。

上の例文の共通な特徴としては、他者から聞いたことをそのまま条件にすることである。前件の条件は、話し手にとって受身のことであるに對して、後件は話し手の能動的な意

志の表現が多い。

二、限定・話題提示

5、風景なら、桂林に及ぶところはない。

6、そのことなら、もう済みました。

7、午前は忙しいですが、午後なら暇です。

8、果物なら大丈夫です。

この「限定・話題提示」の「なら」は「それに関するものについて言えば」の意味と考えられる。前件の条件節に示された以外のものを除外されたという意味も考えられる。すなわち、「風景でなければ、桂林を超えるところがあるかもしれない。」「そのことでなければ、済んでないかもしれない。」のニュアンスがうかがえる。前件に提示されていないことは、後件の内容に反対する可能性を暗示された。例えば、例7、8の場合は、「午前なら暇がない」「魚ならだめです」という意味が含んでいられると思われる。

三、反事実条件

9、パパなら、助けてくれた。

10、もしあの時断わっていたなら、
今こんなに苦しんでいないだ
ろうに。

11、もう少し早くから取り組んで
いたなら、期日までに間に合
っただろう。

「なら」で表す反事実条件は基本的
に、「たら」「ば」で示すものと
一緒である。どちらも、過去の現
実に反していることを仮定して、
条件として用いるものである。だ
から、仮定条件の一種でも言え
る。

ここで、もうひとつ問題になった
のは従来の研究において「タナ
ラ形は、仮定条件のタラの強調
形のような意味である」として、
特に注意された。(注18)上の
反事実条件(仮定条件)の例10、
11を考えたら、確かそのとお
りである。また、「明日ボース
が出たなら、買い物に行こう。
」の「たなら」は「たら」の強
調形も納得できる。しかし、「昨日

ボーナスが出たなら、明日は買い物
 に行こう。」と「昨日ボーナスが出
 たら、明日は買い物に行こう。」と
 は、ただ仮定の意味の強さの違いだ
 ろうか。筆者の目から見れば、後ろ
 の文はちょっと落ち着かないようで
 ある。反事実のことにおいても、未
 来のことにおいても、「たなら」と
 「たら」は両方とも仮定の意味を表
 すのである。しかし、過去のことに
 おいては、「たら」形式が仮定の意
 味を示すのか、よく分らないところ
 である。「昨日ボーナスが出たら、
 明日は買い物に行こう。」という文
 が落ち着かない理由は、「たら」は
 「完了」につながるためではないか
 と思われる。もし、前件の品詞は動
 詞でなかったら、例えば「寒かっ
 たら（寒かったら）、窓を閉めまし
 ょう。」のような文であれば、文法
 的だと思える。このことのついでに
 まだまだ研究の余地は十分にあり
 と思う。今後の課題として考えたい
 と思う。

四、純粹な仮定条件

12、こちらが東なら、そちらは南である。

13、これぐらいで上手といえるなら、山田さんも上手だと言えます。

14、行くなら、はやく準備しなさい。

15、ほしいなら、持って帰りなさい。

ここで、なぜ「純粹の仮定」とあらためたのか。まず富田隆行氏の意見を見てみよう。（注19）

「したがって、「なら」を使った場合も、「なら」は断定の意味を持っていますから、「なら」の付いた語が表している事柄は、それに相違ない確定している事柄を表しています。

例えば、「安いなら……」という言い方は、「安い」ということは、すでに、確定していて（決まっていて／分かっている）、その「安い」という条件（確定条件）のもとで、話し手

が どう する か と い う こ と を 後 ろ
の 句 で 述 べ る 言 い 方 で す 。

○ A : 靴 を 買 い に 行 き ま せ ん
か 。 駅 前 の 靴 屋 は , 今 , 安
い そ う で す よ 。

B : 安 い な ら , 買 い に 行 き ま
す 。

今 ま で 見 て き た よ う に 、 情 報 を 受
け る 用 法 に し ろ 、 限 定 ・ 話 題 の 限 定
に し ろ 、 純 粋 の 仮 定 の 用 例 に し ろ 、
い ず れ も 、 条 件 節 に 現 わ れ た の は 、
話 し 手 に と っ て は ひ と つ の 不 明 瞭 な
こ と で あ る 。 「 か り に そ れ が 真 で あ
れ ば 」 の よ う に 話 し 手 の 心 の 態 度 を
表 す も の と 考 え ら れ る 。 た と え ば 例
の 7 、 「 午 後 な ら 」 は 本 当 に 午 後 で
あ る か ど う か は 、 話 し 手 が 発 話 の 時
点 に こ の 前 提 の 成 立 で き る か ど う か
に つ い て 、 自 信 が な い 意 味 合 い が 感
じ ら れ る 。 情 報 を 受 け る 場 合 も 、 そ
の 情 報 が 本 当 に 真 で あ る な ら と い う
仮 定 の 気 持 ち が 含 ん で い る と い わ
る 。 だ か ら 、 本 研 究 で は 「 な ら 」 を
す べ て 仮 定 表 現 と し て 考 え た い と
思 っ て 、 「 な ら 」 で 接 続 さ れ た

文の後件に話し手の意見や判断や助言など、意志を表すものが伴っているのが一般的である。

第二章 条件表現の 比較・考察

第一節 従来の研究について

従来の研究においては、各形式の対比について「文末の表現に関係がある」ということが数多く指摘された。(注20) 具体的に言えば、次のような諸説がある。

寺村秀夫氏の意見は以下のとおりである。

「では条件の三形式(たら、れば、と)(注21)の使い分けは、何によるのだろうか。明らかに問題になるのはQ文(後件)(注22)のムードであろう。これは、これらの語法を説明している諸家の一様に指摘していることだが、「～すると」は、Q文が「～しよう」「～しなさい」「してください」のように、勧誘とか命令・依頼とか

を表している場合には使えない。つまり、その表現が話し相手の意思に依存するような事態は「たら」で条件づけることはできるが、「と」で条件づけることはできない、というように説明できるだろう。話し手の主観が入る表現はだめだという説明を見受けるが、その制約はきつすぎる。「君が行くと皆よろこぶだろう / よろこぶにちがいない」などは可能であろう。

「P（前件）ればQ」はやはりPの必然的帰結としてQが実現する、という意味合いが強い表現だが、Q文のムードについては、「と」よりも制約がゆるいように見受けられる。

「たら」には、そのようなQについての制限がない。」

益岡隆志氏の意見は次のとおりである。

「一般的因果関係を表すレバ形式の文のムードは、物事の道理に関する認識を表すという特

徴のために、真偽の判断を表すものに限られることになる。(注23)

タラ形式の文には、レバ形式の文に見られるような文末のムードに関する制約がない。真偽判断のムードの他に、意思のムードもあり得るし、願望のムードもあり得るし、さらには、依頼のムードもあり得るといった具合である。」(注24)

豊田豊子氏は次のような意見がある。

「「と」には、後件に対する大きな制約があります。それは、「と」の文では、後件に次のようなものは決して来ないと言うことです。

10時に なると 明る いと	{	× 勉強しよう。	(意志)
		× 勉強しなさい。	(命令)
		× 勉強したい。	(希望)
		× 勉強しましょう。	(勧誘)
		× 勉強してください。	(依頼)
		× 勉強したほうがいい。	(忠告)
		× 勉強しては行けない。	(禁止)

つまり、「と」の文では、後件に話し手の意志的な態度を表すものはきません。ただし「10時になると、山田さんが来るだろう。／来るかもしれない。」というような話し手の判断を表すものは、非文法的にはならないようです。（注25）

「たら」は、「と」「ば」に比べて、制約が少なく、後件に話し手の意志的な態度を自由に表すことができます。それで、条件文で後件に意志・命令・依頼などを表す場合は、「たら」を使うことが多くなります。（注26）

以上のいろいろな説を見てきたが、先学たちは、主に後件のことについて詳しく論じられた。まとめると、条件表現の各形式（「と」、「ば」、「たら」）の使い分けは、主として後件のムードによるものと考えられている。「たら」は後件の制限がなく、自由に使える形式に対して、「と」は後件の制約が強く働

いていて、話し手の判断を表すムードの以外にはほとんどできない。「ば」の文末のムードの制約度は「たら」と「と」の間のものである。

前件についての論述は、管見の限り、次のような認識のほかにはほとんど印象がない。

豊田豊子氏の意見がそれである。以下それを示す。(注27)

「「ば」の文では、前件の述語が動格的か静格的かで、後件への制約が異なるようです。動格的な述語としては動詞、静格的な述語としては形容詞が一応入りますが、動詞でも状態を表すものもある・いる・～ている・～てある・可能動詞・～すぎる・ちがう・(薬が)効くなどーが、この中に含まれるようです。

静 的 な 述 語

安 け れ ば 山 田 さ ん が い れ ば	○ 買 お う 。	(意 志)
	○ 買 い な さ い 。	(命 令)
	○ 買 っ て く だ さ い 。	(依 頼)
	○ 買 っ て は い け ま せ ん	(禁 止)
	○ 買 っ た ほ う が い い 。	(忠 告)
	○ 買 い ま し ょ う 。	(勧 誘)
	○ 買 い た い 。	(希 望)

動 的 な 述 語

授 業 が 始 ま れ ば あ し た そ こ へ 行 け ば	× 聞 こ う 。	(意 志)
	× 聞 き な さ い 。	(命 令)
	× 聞 い て く だ さ い 。	(依 頼)
	× 聞 い て は い け ま せ ん	(禁 止)
	× 聞 い た ほ う が い い 。	(忠 告)
	× 聞 き ま し ょ う 。	(勧 誘)
	× 聞 き た い 。	(希 望)

上 記 の よ う に 、 動 的 な 述 語 に
「 ば 」 が 続 い た 場 合 、 後 件 で は
話 し 手 の 意 志 的 な 態 度 は 表 せ ま
せ ん 。 し か し 、 こ れ に つ い て は
か な り 揺 れ が あ る よ う で す 。 次
の よ う な も の は 、 筆 者 の 調 査 で
は 5 0 % の 人 が 言 え る と 言 っ て
い ま す 。

？ 今 年 の 夏 も 暑 い 日 が 続 け

ば、軽井沢へ行こう。

つまり、前項・後項ともに同一主語で、前項が動词的な述語の場合は、後項に話し手の意志的な態度を表す表現は来ませんが、静的な述語に近付けば、可能になるようです。また、次のような場合も可能なようです。

もしあなたがうそだと思えば、山田さんに聞いてみなさい。

これについては、前項が動詞の場合は、特に慣用的用法が多いようですと解釈された。」

豊田豊子氏とほぼ同じな意見を益岡隆志が述べられた。(注28)

「レバ形式が動的事態を表す場合、文末のムードは、一般的因果関係を表す時と同様に、真偽判断を表すものに限られる。これに対して、レバ形式が静的事態を表す場合は、このような文末のムードの制約がなくなり、タラ形式の文と同じ状況になる。」

以上見てきたように、前件につい

ての指摘は、「ば」形式に限られていて、ほかの形式についてはほとんど触れていないようである。そして、この「ば」についても、やはり後件のムードを中心に、前件の制約性が論じられている。しかし、前件の働きは本当にこれほど弱いのか、思わず疑いが浮かんでくる。

序のところに挙げたように、

A 雨が降ると	}	体育館で します。
雨が降れば		
雨が降ったら		
雨が降るなら		

という文は、大体同じ意味のことをいっている。ここで従来この研究で認められていた。（注29）その点、どれも非現実のことである。諸形式の相異に、筆者の意見としては、前に述べたように、後件のムードによって支配されること、論じられてきた。また、各論の意見も多かった。各表現形式の違いについて、はまた十分明らかになっ

て いない よう に 思 う 。

実 は 、 外 国 人 が 日 本 語 の 条 件 表 現
に 対 し て 理 解 し が た い の は 、 一 つ の
形 式 に い く つ か の 異 な っ た 意 味 を 有
す る よ り 、 む し ろ 仮 定 条 件 に あ る と
考 え る 。 具 体 的 に 言 え ば 、 上 の A 例
の 場 合 は 、 日 本 語 と し て ほ ぼ 同 じ 仮
定 の 意 味 を し て い る か ら 、 中 国 語 に
訳 し た ら や は り 同 じ 表 現 で あ る (ほ
こ の 言 語 に 訳 し た ら ど う な る か は こ
こ で 省 略 さ せ い て い た だ き た い) 。
け れ ど も 、 上 の 例 文 と 同 じ よ う な 仮
定 条 件 文 を 作 ろ う と 、 前 件 の 動 詞 が
違 う の で 、 後 件 の ム ー ド の 影 響 を 除
い て も 、 そ の 違 い が 存 在 す る の が 気
づ い た 。

B	*	食	べ	る	と	}	ご 飯 を 作 り ま す 。
	*	食	べ	れ	ば		
	*	食	べ	た	ら		
		食	べ	る	な		

C	*	あ	な	た	が	書	く	と	}	私 が や め ま す 。	
		あ	な	た	が	書	け	ば			
	*	あ	な	た	が	書	い	た			ら
		あ	な	た	が	書	く	な			ら

A の 場 合 は も ち ろ ん ど ち ら が 最 適

であるかという問題があるけれども、どれも言える。そして、どれも大體同じ意味をしていることが一般的に認められていゝ。しかし、BとCでわかちなうに、Aと同様のム一つドを持ちながらも、Aと同様の四つ文は同じ意味が成立つの考えられない。＊を付けた文は、成り立たないのか、ほかの意味になつてしまふか、とにかく未来に起らない。たとへば、仮定した方がいいが、生じない。その原因は前件にあるのか。その第二節で論じてみたい。

第二節 各形式の比較について

前に述べたように、従来の研究は主として後件にある。この禁止・忠告・命令・希望・希心の動詞述語の現在形を中心とし、

て、前件の品詞ごとに、各形式の違いを考察してみたい。

いろいろな品詞の中で、「と」「たら」「ば」「なら」が接続可能なものは主として体言（名詞、代名詞、数詞）と用言（動詞、形容詞、形容動詞）（注30）である。数詞の用例は実際の言語活動の中ではほとんど見られないので、ここでは考察対象にしない。

まず、接続可能な各品詞の接続法について明らかにしておきたい。

(ば) 」 と なる 」 と い う 見 方 が 多 い 。
 け れ ど も 、 今 ま で の 調 べ の 中 で 「 元
 気 で あ れ ば 、 元 気 に 写 る 」 「 妹 で あ
 れ ば 、 考 え て あ げ た い 」 の よ う な 実
 例 が 出 て き た の で 、 こ こ で 「 形 容 動
 詞 (語 幹) + で あ れ ば 」 「 名 詞 ・ 代
 名 詞 + で あ れ ば 」 の 形 を 取 る こ と
 に し た 。

次 は 、 品 詞 に そ っ て 考 察 し て 行
 こ う 。

一 、 名 詞 ・ 代 名 詞

- | | | | |
|-----|-------------|---|-----------|
| 1 、 | 明 日 だ と | } | 行 き ま す 。 |
| | 明 日 で あ れ ば | | |
| | 明 日 で し た ら | | |
| | 明 日 な ら | | |
| 2 、 | 私 だ と | } | や り ま す 。 |
| | 私 で あ れ ば | | |
| | 私 で し た ら | | |
| | 私 な ら | | |
| 3 、 | 反 対 だ と | } | 止 め る 。 |
| | 反 対 で あ れ ば | | |
| | 反 対 だ っ た ら | | |
| | 反 対 な ら | | |

名 詞 ・ 代 名 詞 の 例 を 見 た ら 、 ど ち

らがよく使われるか、あるいは最適であるかという問題があるかもしれないけれども、いずれも仮定条件文と考えるのは無理ではないと思う。具体的に言えば、1の場合は四つの文がともに「もし、明日であるなら行きます」という意味で取れる。2、3の場合は「かりに、私なら、やります」「もし、反対するならば止める」という意味である。すなわち、名詞、代名詞の場合は、後件に特別なムードが来ない限り、四つの形式はどちらでも、仮定条件を表すことができる。

二、形容詞

古代日本語においては、「シク活用形容詞の情意性」「ク活用形容詞の状態性」という山本俊英氏の素晴らしい指摘がある。現代日本語に辿りついて、さらに詳しく「感情」「属性」「程度」に分けることが多く見られるので、ここで「感情」「属性」「程度」の分類にしたがって考察して行こうと思う。

感情 (注 3 1)

1、	寒	い	と	}	窓を閉めます。
	寒	け	れ		
	寒	か	っ		
	寒	い	な		

2、	痛	い	と	}	やめます。
	痛	け	れ		
	痛	か	っ		
	痛	い	な		

3、	淋	し	い	と	}	私が残ります。
	淋	し	け	れ		
	淋	し	か	っ		
	淋	し	い	な		

4、	欲	し	い	と	}	あげます。
	欲	し	け	れ		
	欲	し	か	っ		
	欲	し	い	な		

属性 (注 3 2)

5、	は	や	い	と	}	乗ります。
	は	や	け	れ		
	は	や	か	っ		
	は	や	い	な		

6、硬いと
硬ければ
硬かったら
硬いなら

} やめます。

程度

7、多いと
多ければ
多かったら
多いなら

} もらう。

8、高いと
高ければ
高かったら
高いなら

} 買わない。

9、強いと
強ければ
強かったら
強いなら

} やめます。

上の形容詞の用例は筆者が今教えている中国語教室の生徒たちに狭い範囲であるが、アンケート調査をしたものである。その結果は筆者の予想と一致し、そして各生徒の間の個人差も出てこなかった。「感情」「属性」「程度」のいずれも「と」の接続文を除いて、すべて未実現の仮定

条件として考えているという答えを得た。「と」で接続された文は、場合によって習慣的な条件と考えるか、あるいは無理をしない限り使わないと答えてくれた。具体的に言うと、「寒いと窓を閉めます。」という用例は、「あなたは、寒いとき窓が開いていたらどうしますか。」のような問いについての答えでない場合、ほとんど使わないと答えた。「多いともらう。」「高いと買わない。」のような文は、使うとしても、主として、習慣的なことがらに使うと答えた。例えば、「毎年、クリスマスの準備が多い（余る）と私がもらう」とか、「いつも高いものを買わない。」という意味で「高いと買わない。」を使うそうである。「淋しいと私が残ります。」「欲しいとあげます。」のような表現はまずないと答えてくれた。以上を要するに、前件が形容詞である場合、「と」で接続された文は、仮定条件と考えるのは無理だと言えるだろう。なぜ、こういうことが生じたのかと言うこと

については、各論で述べたように、
「と」形式は、前件と後件の一体性
が強くて、習慣的なことを表す特徴
があると考ええる。

三、形容動詞

- | | | | |
|----|--------|---|-------------|
| 1、 | 好きだと | } | あげます。 |
| | 好きであれば | | |
| | 好きだったら | | |
| | 好きなら | | |
| 2、 | いやだと | } | やめます。 |
| | いやであれば | | |
| | いやだったら | | |
| | いやなら | | |
| 3、 | 親切だと | } | 受け入
れます。 |
| | 親切であれば | | |
| | 親切だったら | | |
| | 親切なら | | |
| 4、 | 同じだと | } | 買います。 |
| | 同じであれば | | |
| | 同じだったら | | |
| | 同じなら | | |

5、丈夫だと
 丈夫であれば
 丈夫だったら
 丈夫なら

} 使います。

周知のように、形容詞と形容動詞は意味・用法においては、ほぼ同じである。違うのは、接続法だけである。だから、調査によって得られた結果は、形容詞と同じであった。つまり、「と」形式以外は、ほかの三形式はすべて仮定条件として認められた。「と」が認められない理由は、前に述べた形容詞の理由と同じと考える。

四、動詞

前に述べた名詞・代名詞、形容詞、形容動詞の場合は、筆者の調査では答えのばらつきがほとんど見られなかった。動詞の場合には、一つの例文であっても生徒の間に意見が異なったり、例文によつてある形式が使えたりか使えないか、意見が違ったりしたことがある。各自の答えを総合すると、次のように大きく三つに分

けることができた。(一)は四つの形式がすべて可能な例であり、(二)は「なら」形式が成り立たない場合であり、(三)は「なら」形式が最適の場合であった。

(一) 四つの形式がすべて言える場合

1、	1ドル130円台になると	}	止める。
	1ドル130円台になれば		
	1ドル130円台になったら		
	1ドル130円台になるなら		

2、	戻ると	}	一緒に食事をします。
	戻れば		
	戻ったら		
	戻るなら		

3、	燃えないと	}	もう一度やります。
	燃えなければ		
	燃えなかったら		
	燃えないなら		

4、	信じると	}	叶う。
	信じれば		
	信じたら		
	信じるなら		

5、雨が降ると
 雨が降れば
 雨が降ったら
 雨が降るなら
 } 体育館で
 します。

6、ご飯があると
 ご飯があれば
 ご飯があったら
 ご飯があるなら
 } 食べる

例 1 から例 6 まですべて可能であるといっても、やはり形式によつて意味の違いがあるが分かる。「と」の場合には「1ドル130円台になる」とやめる。「戻ると一緒に食事をします。」「信じると叶う。」などは、前件が実現されるとき、必ず後件を行ふという「決定」あるいは「確定」のこととしてまず思われる。けれども、話し手は発話時に前件が実現されるかどうかは分からなかったり、あるいは確信が持っていなかったりする意味を有するので、仮定の意味として理解される。例 6 の「と」も「母のところへ行ったら、いつもご飯があると食べる、ないと食べない」という意味の仮定である。以上

を要するに、「と」で表される仮定表現は、わりと仮定性が弱くて、確定の意味を持ちながらも、仮定の意味にしているのである。

「ば」は事実不定の仮定条件としてほとんど異議がない。さらに分析することはここで省略する。

「たら」は第一章で述べたように、そもそもは、過去・完了を表す助動詞「た」の仮定形である。ここでも、もちろん、前件のことが実現された時点に立って、後件のことを実施するという意味であると考ええる。ただし、「雨が降れば」「雨が降るなら」のように、可能性とか、情報によって後件が決定されるよりは、「雨が降ったら」のほうは「雨が本当に降り出した」という事実が生じ次第に後件に移行するという意味がもっと強く感じられる。

もうひとつ注意してほしいのは、例1から例6までに「たら」で接続された文の前件は、決して過去とか・完了の意味には取られないということである。

次の例を考えてみよう。

A、仕事が終わったら行きます。

B、ご飯を食べたら宿題をやり
ます。

A、Bの場合は「仕事が終わって
から（終わったあと）行きます」「ご
飯を食べてから（食べたあと）宿題
をやります」という時間の順序の意
味の表現である。すなわち、「たら」
で結ばれた文は、条件と言っても、
例1から例6までのような仮定条件
ではなく、未来における前後関係
を示す文である。

ここで、もうひとつあきらかにな
ったことがある。「終わったら」「食
べたら」が、どちらも完了の意味を
示している。これは「終わった」「食
べた」の意味と一致する。しかし、
1から6までの例文をよく考えてみ
ると、完了の意味を持っていないこ
とが分かる。例えば、「雨が降っ
た。」の文は、「昨日（いまさき）
雨が降った。」という過去の意味に
も取れるし、「雨が降り終わって、
今は降っていない。」という完了の

意味にも取れる。これに対して、「雨が降ったら体育館でします」の「たら」は、過去のことではなく、未来のある時点に生起することを仮定するのである。そして、「雨が降り終わってから」という完了の意味でもなく、「雨が降りはじめ」の意味しか取れないのではないかと思う。例3の「燃えなかったら」、例6の「ご飯があったら」は「燃えない」と「ご飯がある」という状態を示すのみではない。すなわち、以上の例文の中の「たら」でつなぐ文は、肯定、否定にかかわらず前件が完了の意味をしないといふことである。これららの「たら」形式が完了の意味を持たないことが仮定を意味する条件であると言えよう。

なぜ、同じ動詞でありながら、例1から例6までの動詞が完了の意味を許さないのに対して、例A、Bの動詞が完了の意味を有することについて、まだ分からないことである。自他動詞の方から考えれば、「降る」

と「終わる」とともに自動詞である。
 アスペクトの面から考えても、「降
 る」は降る→降っている→降った、
 「食べる」は食べる→食べている→
 食べたという同じ変化の段階をへる
 継続動詞（注33）であり、違いが
 見られない。この問題は今後の課題
 としてさらに研究する必要があると
 思う。

「なら」形式は「言える」と生徒
 たちが答えてくれた。判断するとき
 には単純な仮定と情報によるものと
 二つの原則で判断したそうである。
 第一章の第四節で述べたように、ど
 ちらにしても仮定条件として考えら
 れる。

（二）「なら」形式が成り立たない
 場合

7、	この薬を飲むと	}	風邪は すぐに 直る。
	この薬を飲めば		
	この薬を飲んだら		
	この薬を飲むなら		

8、右へ曲がると
 右へ曲がれば
 右へ曲がったら
 右へ曲がるなら

郵便局
 がある。

9、春になると
 春になれば
 春になったら
 春になるなら

桜が咲きます。

10、あと三日が立つと
 あと三日が立てば
 あと三日が立ったら
 あと三日が立つなら

結果がわ
 かる。

7 から 10 までの用例は、それぞれ一般的な事実や反復的な事象や未来において確実に実現することである。「と」形式と、「ば」形式にはこういう用法があることを第一章で述べておいた。「たら」で接続した前件は一応実現されたことか、あるいは到達したことを表すとともに、その実現された状態や効果が一定の時間内に続いていることも示しているのである。つまり、完全の完了の意味ではない。そして、(一)の仮定表現と違って、確定の表現である。

この組の一番顕著なことは「なら」形式が認められないことである。ここでなぜ「なら」が使えないかと言うと、前章で述べたように、「なら」のいずれの用法もあくまでも仮定の意味を帯びていることから、反復事象や一般的な事実や無意識の表現などに向かないことと考える。

(三)「なら」形式が最適の場合

- 11、
 × 食 べ る と
 × 食 べ れ ば
 × 食 べ た ら
 ○ 食 べ る な ら
 } ご 飯 を
 作 り ま す 。
- 12、
 × あ な た が 書 く と
 ○ あ な た が 書 け ば
 △ あ な た が 書 い た ら
 ○ あ な た が 書 く な ら
 } 私 が や
 め る 。
- 13、
 × 売 る と
 ○ 売 れ ば
 △ 売 っ た ら
 ○ 売 る な ら
 } 買 い ま す 。
- 14、
 × 着 る と
 △ 着 れ ば
 × 着 た ら
 ○ 着 る な ら
 } あ の 紅 い コ ー ト
 を 着 ま す 。

- 15、
- | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|-----------------|---|
| × | 遊 | ぶ | と | } | 山本さんと
一緒に遊ぶ。 | |
| △ | 遊 | べ | ば | | | |
| △ | 遊 | ん | だ | | | ら |
| ○ | 遊 | ぶ | な | | | ら |

上の例文の中で○は可、×は不可、△は可と不可の間のものを表すのである。この(三)の組と(一)の組は後件の動詞がともに人間の行為を表すもののなのに、なぜこんな大きな違いが生じたのか、私見としては、原因は前件の動詞にあると思う。

上の例で見ると、「ば」と「なら」は事実不定の仮定条件としてどちらも使える。「たら」で接続された前件は(一)と違って、主として完了の意味を表していて、前後的な意味合いがあるので、論理的に成り立たないことが生じる可能性もある。例えば「売ったら買います」の場合は、「売ってなくなったら」としてしまおうと、「買います」という後件が成り立たない。けれども、12のよう「あなたが書いたら私がやめる」というのは、「あなたはもう書き終わったら私はまた書く必要がない」と

いう完了したことを仮定の気持ちで言い表す文が生成する可能性がある。ただし、この時は「なら」「ば」で表す文と意味が違っている。

過去、現在、未来に関係ない仮定の意味を示す「なら」形式と、例11のように「なら」形式以外に成り立たない理由は、先行研究で指摘されたように考える。(注34)

「「なら」は「AならB」の形で、「Bが先で、Aが後」という時間的關係を表すときは「ば」、「たら」、「と」では置き換えられない。」

具体的に言えば、「ご飯を食べるなら(A)、作ります(B)」の文は、論理的に先にご飯を作る(B)、後は食べる(A)という時間的關係を有するものである。「なら」で接続された場合は(A)を先に言って、(B)を後件で表すのもできる。これに対して、「ご飯を食べたら(A)、作ります(B)」のような「たら」で接続された文は時間的な順序が逆転したので文が成り立たな

い ことである。

以上は条件文の後件に意志・命令・依頼・禁止・忠告・勧誘・希望などのムードの表現がなくて、ただ動詞の現在形の場合に限って、品詞別に見たがって、四つの形式の違いをようてきた。また、以下のようである。

名詞・代名詞の場合は、形式による相違が見られない。いずれも仮定条件動詞の場合には「と」で接続が取れる。「と」で結ばれた前後の動詞は、習慣・反復の意味を取るの動詞は、一般的である。最も複雑なのは、動詞の場合である。「たら」形式は、完了の意味を有していない。差があるけれども、四つの形式がニュアンスの異なる非現実の仮定を言いかねない。すなわち「ば」形式と「なら」形式は変わりなく、仮定の働きをしている。が、「と」形式と「たら」形式は、「ば」と「な

ら」と同じような非現実の仮定条件を表すものではなく、成り立たないのかあるいはほかの意味になってしまふ。「なら」形式は仮定の表現においては、最高な表現のようである。しかし、他方では、反復事象や一般的な事実や無意識の表現などに向かないことである。

第三章 日本語の順接条件表現と中国語の「就」

第一節 中国語の条件表現について

ここまで、日本語の条件表現について見てきたが、おそらく外国人がこれを見て学ぶ時、難しさは、ある程度分かっている。今回の調査・考察として、筆者は一人の外国人とこの協力が多かった。だから、日本人の方で、文法的にほとんど考えたことがない。日本人が、協力した後に「日本語が難しい」「考えれば考えるほど難しい」といっただけで、中国人が日本語の条件表現について、理解しにくい。中国語に、日本語の複雑性は、日本語の条件表現に対応する表現形式も決して単純の

ものではないこともある。

もう一つは、中国語自体は条件表現の形式がかなり複雑なものであると考えられる。それらを大きく分けて、接続詞を用いる場合と接続詞を用いない場合の二種類になる。中国語の順接条件表現において、接続詞を用いる場合は、前の文に「要是」「如果」「假如」「假使」などが現われる、後の文に「就」などを用いて呼応することが多い。そして、前の文の接続詞がしばしば省略され、後ろの文に「就」だけ用いるあるいは二つの文を並べるだけで順接条件表現を示すことがある。さらに、継起と習慣・反復の意味を示す「一～就～」の慣用形もある。

まず、接続詞を用いる場合を見てみよう。

1、如果不滿意，我就可以給你換¹。

(もしご不満ならお取り替えします。)

2、要是干那樣的事就會被老師罵的。

(そんなことをしたら、先生に

しかれるよ。)

- 3、若是你早一些通知我昨天就来了。

(もしあなたが少し早めに知らせてくれたら、私は昨日来ましたのに。)

- 4、如若被敌人反对那就证明我们同敌人划清界限了。

(もしも敵に反対されれば、それこそ我々が敵と一線を描いていることが証明されるわけだ。)

- 5、假如领导同意明天清早我们便出发。

(もし指導部が同意してくれたなら、明日早朝私たちはすぐ出発する。)

- 6、作家倘若不深入生活岂能塑造出感人的艺术形象？

(作家がもし生活に浸透しなければ、どうして人を感動させるような芸術作品を作り出すことができるか。)

- 7、想吃就买吧。

(食べたいなら、買いなさい。)

8、要论学习的话谁也赶不上他。

(勉強といえ、誰も彼に追いつくものがない。)

9、只要你给他写一封信他就会帮助你。

(彼に一筆書きさえすれば、彼は君を助けてくれるよ。)

10、二买就好多。

(買うとなると、どっさり買ってしまう。)

上で見て来たように、中国語の順接条件表現においては、接続詞を持っていての場合だけでも決して一つ、二つではなく、少なくとも十種類以上がある(接続詞を持たない例は、具体的にこのすぐあとに触れる)。このなかで、すべて仮定関係とはいえないけれども、仮定関係を示すのが、中のほとんどである。そして、「如果～就～」 「要是～就～」など、前件・後件ともに関連詞を用いることもあるし、例7のような後件だけ「就」を持つ場合もある。実は、前件の接続詞か、あるいは後件の「就」か、どちらか一方だけを使って、同

じ意味を表すのが十分できる。すなわち、「不滿意，我就可以給你換。」

「如果不滿意，我可以給你換。」「如果不滿意，我就可以給你換。」の三つの形式は同じ意味をしているのである。さらに、上で挙げた10例の中で、大部分の例は接続詞を書き換えても、意味の変わりが見られないこともある。具体的に言えば、2から9までの形式を例1に用いれば、すべて言える。しかし、例9の「只要」を例6に用いると、おかしい文になる。「只要」を用いるとすれば、後件の疑問形式を変えなければいけない。つまり「作家只要不深入生活就不能塑造出感人的艺术形象」となるのである。

日本語条件形式の難しいところは、日本語が語尾変化（つまり活用）のある言語であり、そして「と」「たら」「なら」「ば」はもともと意味の違う語源から生まれたものなので、同じ仮定の意味を示す同時に、微妙なニュアンスを有するのが特徴である。中国語は語尾変化がない言

語であり、接続詞は二つの独立して
いる文を結ぶだけでいろいろな意味
を表すことができる。接続詞の意味
が違わなければ、どちらを使っても
意味がほとんど同じである。少しの
違いがあるとしても、「假如」「假
使」は「要是」「如果」よりやや書
言葉的であるという程度である。

以上は接続詞を持つ場合であっ
た。次は接続詞を持っていない場
合を見てみよう。

1、咱俩能一起去那倒挺好。

(君と一緒にに行けるなら、それ
は都合だ。)

2、人家叫了你好几声你倒是答应
啊。

((私が) 何回も呼んでいるの
に返事ぐらいしたらどうだ?)

3、你有什么话只管对我说不要客
气。

(何か話があるなら、かまいま
せんから私に話しなさい。)

4、有了工作、她每月给我十块钱。

(仕事ができたら、彼女は毎
月十円くれます。)

5、多读书多懂道理。

(よく勉強すれば道理に詳しくなる。)

6、说实在的话，为粮食来的。

(正直に言えば食べ物のために来たのです。)

7、我吃苹果牙痛。

(私はりんごを食べると歯が痛くなる。)

8、有学校支持他拦不住啊。

(学校が支持しているんだから、彼はじゃまだてできないよ。)

(学校の支持があるなら、彼はじゃまだてできないよ。)

以上の例文は中国語において、条件接続形式のない表現であるが、日本語に訳したら、条件形式が出てきた。そして、日本語においては、条件接続形式なしの条件表現は不可能である。このゆえに、中国語は前件と後件のつながりで、条件を表すことができ、中国語の条件表現が簡単なものであるというわけでもない。むしろ、難しいと言ったほうがいいと思う。上にあげたのは、ほんの少

しである。広く網羅するならば、それはきりのないものである。

そして、例 8 のような接続詞（連詞）や関連詞のない文は一つの意味だけには読めない場合がある。大河内康憲氏に以下のような指摘がある。（注 3 5）

「このような例文は論文，論説の類には少ないが，しかし，小説，とりわけその会話の部分や話劇では決して珍しいものではない。話し言葉の世界ではこのような表現が誤解されずに通っているのが中国語である。むしろ中国語の複句の常態である。」

だから、中国語の条件表現を正しく理解、使おうと思うのは決して簡単なことではない。中国語に対して、深く理解できない人なら、やはり難しいことではないかと思う。

序のところで述べたように、日本語の条件表現において、順接条件のほか、逆接条件と原因・理由文もある。それに応じる中国語の表現形

式は、接続詞を持つものだけを、ここで簡単に挙げる。

逆接条件

- 1、尽管下着大雨、刮着大风，我们也得前进。

（雨が降っており大風が吹いているが私たちは前進しなければならない。）

- 2、东西虽然好但是价钱太贵。

（ものはいいけれども値段が高すぎる。）

- 3、尽管有丰富的经验，这回可是没有办法。

（豊かな経験があるけれども、今度は方法がない。）

- 4、就是下点儿雨也得去。

（たとえ少しぐらい雨が降ろうとも行かなければならない。）

- 5、哪怕是小孩子也不会说那样的话。

（たとえ子供でもそんなことは言わないでしょう）

中国語の逆接表現は、主として上のような接続法がある。ただし、前件と後件の対応は決まっていて、絶

対動かないことではない。例えば、例2の場合は「虽然～但是～」を「虽然～可是～」といってもいいし、「虽然」を「虽」、「虽说」などと書き換えても、意味には変わりがない。例5の場合は、「也」だけ使うこともよくある。そして、これらの接続詞はどこに置くべきかという問題も、日本語ほど、はっきり決まっていることではない。例2の「虽然」を主語「東西」の前に持っていっても同じ文と考えられる。

因果関係

1、因为 你没注意，所以搞错了。

（君が注意してくれないから、まちがえたんだよ。）

2、也没什么稀奇的东西，所以不去看了。

（珍しいものもあるまいから、見に行くのはやめた。）

3、由于 疏忽大意，所以耽误了。

（うっかりしていたので、おくられてしまった。）

4、由于 涨水，没能渡到对岸。

（水が出て、向こう岸に渡られ

なかった。)

中国語の因果関係表現は、上に挙げた「因为～所以～」、「由于～所以～」以外に、「由于～因此～」の表現もある。「因为」のかわりに「因」を使ったり、「因此」のかわりに「因而」を使ったりする場合がある。基本的には意味が同じである。ただし、「因」と「因而」は書き言葉としてよく使われている。そして、後件だけに使うとき、「所以」「因此」で表す場合があり、前件だけに使うとき、「由于」「因为」「因」を用いる場合がある。以上の表現を日本語に訳したら、「だいたい」「から」「ので」「て」「のため」になる。

さらに、「因为」は後件だけに使う場合もある。

5、昨天我没去找你，因为有别的事。

(昨日あなたを訪ねに行かなかったのは、ほかの用事があるから。)

例5で分かるように、後件だけに使う「因为」は、日本語において、

接 続 助 詞 の 「 か ら 」 に 当 た る も の で
あ る 。

前 に 述 べ た よ う に 、 中 国 語 の 条 件
表 現 の 中 で は 、 接 続 詞 を 持 た な い 表
現 が 存 在 す る の が 一 つ の 特 徴 で あ
る 。 特 に 、 因 果 関 係 に お い て は 、 こ
の 特 徴 は も っ と 顕 著 な も の で あ る 。

以 上 は 、 日 本 語 の 条 件 表 現 に し た
が っ て 、 中 国 語 の 条 件 表 現 を 見 て き
た も の で あ る 。 ま た 、 中 国 語 の 条 件
表 現 の 中 で 、 「 無 条 件 の 条 件 表 現 」
と い う 一 種 類 が あ る 。 日 本 語 で は 、
と く に ほ か の 条 件 表 現 と 分 け て 論 じ
て い な い よ う で あ る 。 だ い た い 「 と 」
の 一 つ の 用 法 と し て 説 明 し た の か 、
あ る い は 「 て も 」 表 現 形 式 の 一 種 と
し て 論 じ た も の で あ る 。 け れ ど も 、
筆 者 が 日 本 語 の 「 と 」 の 用 法 を 考 察
し た 時 、 複 雑 多 岐 に わ た る 用 法 の あ
る こ と に 遭 遇 し 、 理 解 す る の に 困 っ
た 経 験 が ま だ 新 鮮 で あ る 。 中 国 語 独
自 の 「 無 条 件 の 条 件 表 現 」 な る も の
に つ い て 日 中 対 象 ・ 比 較 研 究 の た め
に 、 こ こ で 簡 単 に 触 れ て お く こ と に
す る 。

無条件とはあらゆる条件に拘束されないということであるから、「あらゆる条件」を包括的に示さなければならぬ。すなわち、いかなる条件の下でも、結果・結論が同じであることを指す。

表現形式としては「无论～都・也」「不管～都・也」のほかに「疑問代詞～疑問代詞～」の形もある。実例は以下のとおりである。

- 1、无论天气好还是不好，他每天都练太极拳。

(天気がよかろうが悪かろうが彼は毎日太極拳を練習する。)

- 2、不管他同意不同意，我们这样决定吧。

(彼が賛成だらうと不賛成だらうと私たちはこのように決めましょう。)

- 3、不管刮大风还是下大雪，我都去。

(大風が吹いても大雪が降っても私は行く。)

- 4、谁犯罪，谁就受罚。

(誰が罪を犯せば誰が罪を受け

る。)

広い意味の中国語の条件表現は、以上に挙げたものに限らないで、ほかにいくつかの意味と形式がある。一応、今回の研究に直接のかかわりがないので、今後の研究に持ち越すつもりである。

第二節 「就」について

第一節で分かるように、中国語の条件表現においては、「就」にかかわるものが最も多い。

「就」の役割が十分理解できれば、日中の比較に対して、あるいは、日本語の条件表現を理解するために、幾分か役立つと思う。

中国語においては、「就」が動詞、副詞、介詞（前置き）、連詞（接続詞）にわたって、複雑な意味を有する品詞である。以下は、「就」が日本語の条件表現に関する意味・用法を紹介しておく。（注36）

一、副詞の「就」

「就」の語が色々な動詞の前に付いて、日本語の条件表現に相当する働きをする。以下それを意味の上から細かく分類して示すことにする。

1、二つの事柄の継起を表す。

- a) “動詞 + 就 + 動詞”の形で、二つの動作が相継いでなされる子とを表す。「就」の前は必ず動詞句を用い、「就」の後には動詞だけでもよい。

○ 说完就走。

(話し終わるとすぐ行く。)

○ 说干就干。

(やろうといたらすぐやる。)

- b) “動詞 + 就 + 形容詞”の形で、形容詞は動作の結果を表す。

○ 再加一点就满了。

(もう少し加えるといっぱいになる。)

○ 看见你就高兴。

(君に会えば嬉しくなる。)

2、“一～就～”の形

- a) “一 + 動詞 + 就 + 動詞”

の形で

○ 一 听 就 明 白 。

(聞 く と す ぐ 分 か る 。)

○ 天 一 亮 就 走 。

(夜 が 明 け る と す ぐ 出 か け
る 。)

b) “ 一 + 動 詞 + 就 + 数 量 ” の
形で

○ 一 干 就 (干) 半 天 。

(や り だ す と 半 日 も や り つ
づ け る 。)

○ 一 讲 就 (讲) 一 大 篇 。

(話 し 出 す と だ ら だ ら と 続
く 。)

a) の よ う に 前 後 二 つ の 動 詞 が 異
な る 場 合 は ひ と つ の 動 作 ま た は 情 況
が 現 わ れ る と 、 す ぐ 別 の 動 作 や 情 況
が 現 わ れ る こ と を 表 す 。 こ の 場 合 の
「 就 」 は 繼 起 と 説 明 さ れ る こ と が 多
い 。 主 語 が 同 じ で も 別 別 で も よ い 。

b) の よ う に 前 後 二 つ の 動 詞 は 同 じ
で 、 主 語 が 共 通 で あ る 場 合 は 、 動 作
が な さ れ る と す ぐ あ る 程 度 に 達 す る
か 、 あ る 結 果 を 生 む こ と を 表 す 。 後
の 動 詞 は よ く 結 果 ・ 方 向 を 表 す 補

語、あるいは数量句を伴なう。この場合の「就」は数量の多い、あるいは程度を強調すると説明されることが多い。筆者の意見としては、a)、b)のいずれか“一～就～”の形でなければ、その意味を表すことができない。そして、どちらも、前件の動作が行われると、すぐ後件のことが現われることを示す。だから、ひとつの文型として、いっしょに考えたほうがいいのではないかと思う。さらにこの“一～就～”で表す文は、a)、b)のどちらも、一回かぎりのことを表すものもあるし、習慣的、繰り返し、真理的なことを表すものもある。

3、前文を受けて結論を出す。(つまり、継起関係のみでなく、因果関係の意味を潜んでいることもある。その場合には、前文に接続詞を伴なうものと、伴わない物とがある。a～dに分けて指摘していく。

a) “如果(只要など)～就～”

の形で

○ 如果 他去，我 就 不去了。

（彼は行くなから私は行かない。）

○ 只要 努力钻研，就 能攀登科学高峰。

（研究に努力を重ねさえすれば、科学の高峰に登りつくことができる。）

○ 下雨 就 不去。

（雨が降れば行かない。）

“如果（只要など）～就～”の形は、中国語において、最も典型的仮定条件表現である。そして第一節で述べたように、前件の接続詞を省略しても、意味には変わりがない。

b) “既然，因为，为了など～就～”の形で

○ 既然 你不想去，就 算了。

（行きたくなかったら、止めましょう。）

“既然，因为，为了など～就～”の形は、すでに実現したものを前提として言い方である。主として、因果関係の文と対訳する。または、そ

の こと を 本 当 の 事 実 と し て 仮 定 し た
表 現 で あ る 。

- c) “ 不 A 就 不 A ” の 形 で (も
し ~ し な い な ら 、 絶 対 に ~
し な い 意 味 を 表 す) ~ し な
い な ら そ れ ま で 。 ~ し な い
と き は ~ し な い が ~ 。

- 他 不 干 就 不 干 , 要 干 就 真 像 个
干 的 样 子 。

(彼 は や ら な い な ら そ れ ま で
だ が 、 や る と な る と 、 り っ ぱ
に や っ て く れ る 。)

- d) “ A 就 A 吧 ” の 形 で (許 容
ま た は ど う で も い い 意 味 を
表 す) ~ し た ら そ れ ま で だ 。

- 丢 就 丢 了 , 着 急 也 没 用 。

(な く し た ら な く し た で 、 し
き も き し た っ て 仕 様 が な い 。)

- 去 就 去 , 怕 什 么 ?

(行 け と い う な ら 行 く 、 な に
が こ わ い か 。)

- 4 、 肯 定 を 強 め る 。 (“ 就 + 動 詞
” の 形 で)

- 不 让 干 我 就 要 干 。

(や っ ち ゃ い け な い と い う な

ら、意地でもやってみせる。)

○ 不去、不去、就不去。

(行かない、行かなといったら絶対行かない。)

以上の二例は、「なら」あるいは「たら」の仮定条件句に相当するが、実はこれは「就」の対訳ではなく、接続詞を持たない前件の意味から導かれたものと思われる。日本語訳をよく読んだら分かると思うが、中国語文に現われていない「説」が日本語文で「というなら」「といったら」と訳された。上の中国文の裏の意味をはっきり言うと、「你说不让干，我就要干。」「我说不去，就不去。」になると思う。だから、厳密に言えば、この場合の「就」は条件表現に関係がなく、肯定の意味を強調するだけである。ただし、このような表現の前件はつねに条件の意味を含んでいる。

二、介詞（前置詞）の「就」

いままで見てきたように副詞の「就」はほとんど後件に用いるに對

して介詞の「就」は、主に文の最初に現われる。そして、多種の意味を有するものである。しかし、日本語の順接条件と対応できるのは、以下の表現だけである。

（動作の対象や範囲を示す）～について。～にもとづいて。

○就专业知识来说，我远不如你。

（専門知識について言えば、
ぼくは遠く君に及ばない。）

○就我来说，再走10公里也行，
可是体弱的同志该休息一会儿了。

（私でいえばもう10キロ歩いて
もかまわないが、体の弱い人は
しばらく休ませなければなら
ない。）

「就」には、以上に挙げた用法だけでなく、「連詞」（接続詞）として逆接の仮定条件などに用いる場合などもある。「と」「たら」「ば」「なら」に直接関連しないので、省略する。

第三節 日本語の順接条件表現と 中国語の「就」について

日本語の「と」「たら」「ば」「ばら」にはそれぞれ多様な意味があつて、ここに総括して示すことが困難であるが、中国語の「就」が日本語の順接条件の四つの形式とどこまで対応するものかを一々示していきたい。

一、「と」と「就」

(一) 仮定条件

- 1、雨にぬれると、かぜを引きますよ。

(被雨淋湿的话、就要感冒的呀！)

- 2、直行だと、一時間ぐらいで行けます。

(如果是直达、一小时左右就能到。)

「如果～就」「要是～就」「～的话，就～」「～就～」などは、仮定条件の代表的な表現である。これは前節の3 a) に相当するものである。

(二) 確定条件

3、ここまで送ってもらおうと、
もう一人で帰れる。

(把我送到了这里、我一个人就能回去。)

4、それだけ取れると、もう沢
山だよ。

(既然能得到那么多、就足够了。)

この用法は、前節の3b)に当たるものである。

(三) “一～就～”の形

5、彼は横になるとすぐ寝入った。

(他一躺下就睡着了。)

6、手紙を読み終わると、彼は
腹を抱えて笑い出した。

(他一读完了信、就捧腹大笑起来。)

7、火事と聞くと、飛び起きた。

(一听说失火，就立刻跳下床来。)

上の例文は、二つの動作が短い時間に続いて起きる継起を表すものである。習慣的、繰り返しの意味が含

んでいない。これは前節の 6 a) に相当するものである。

8、大建築物が完成すると、首都の姿は大きく変わりました。

(大建筑 二 完成、首都的面貌就发生了很大的变化。)

これは前節の 2 b) に当たるものである。例 5、6、7 と文の全体の意味が違っても、中国語においても、日本語においても、やはり、前件と後件が時間的に近い意味を表したものであり、具体的なことをいうのである。

9、春になると、暖かくなる。

(春天 二 到就暖和。)

10、つゆ時になると、雨が多い。

(二 到梅雨季节、雨就多。)

11、長い間、本を読むと、目が疲れる。

(看书 二 看久了、眼睛就会疲劳。)

12、水が百度になると、沸騰する。

(水到 二 百度就沸騰。)

13、私は毎日授業が終わると直ぐ帰宅する。

(我每天一下课，就回家。)

例9、10、11、12、13の文は、前件のことが行われるとすぐ後件のことが生じることを示す同時に、習慣的、真理的意味も含んでいる。

二、「たら」と「就」

(一) 仮定条件

1、雨が降ったら，早く帰ってきなさい。

(要是下雨就赶快回来吧。)

2、おひまがあったら，顔を出してやってください。

(假如有功夫就请你去露露面吧。)

3、人数が多かったら，貸切の車で行こう。

(如果人多就包一辆车去吧。)

4、値段が安かったら，買いましょう。

(要是价钱便宜就买吧。)

日本語において「たら」で表す仮定条件と、「と」で表す仮定条件を

比べてみると、「たら」のほうが文末のムードがわりと多く現われたが、中国語の文においても、終助詞「吧」が応じている。

(二) 確定条件

5、说不去就不去。

(行かないといったら、行かない。)

(三) 反事実条件

6、もし鳥だったら、飛んで行くのだったが。

(如果我是一个鸟、我就飞去了。)

7、傘を持っていいたら、あんなにずぶぬれにはならなかったろうに。

(要是带伞去就不会淋透了。)

日本語の反事実条件、特に決まった表現形式がないといっても、やはり文末に「～が」や「～だろうに」や「～のに」などを伴なうことが多い。中国語においては、文の意味から判断するのが重要な手段であるが、形式上から見れば、未実現のこ

とを仮定した言い方とほとんど変わらない。けれども、現実存在していることに反するのであるから、文末に完了を表す「了」が伴なうことが多い。

(四) “一～就～”の形

8、上海に着いたらすぐに友人を訪ねる。

(二 到上海就去看朋友。)

9、家に帰ったらすぐ母の家事を手伝う。

(二 回家就帮妈妈做家务。)

10、夜が開けたら、起こしてくれ。

(天二亮就把我叫醒。)

11、仕事が終わったら行きます。

(二 下班就去。)

以上の例で分かるように、「たら」と対応する“一～就～”の形は、主として、二つの動作を連続に行うことを表すのである。習慣的、心理的な意味がほとんど含まれていない。

三、「ば」と「就」

(一) 仮定条件

- 1、雨が止めば、でかけよう。
(如果 雨停了、就出门吧。)
- 2、自分に誤りがあれば、自己批判すべきである。
(如果 自己有错误就应该进行自我批评。)
- 3、内容がよければ、買いましょう。
(要是 内容好的话就买吧。)
- 4、彼に会えばよろしくを伝えてください。
(如果 见他的话就代我问好。)
- 5、仕事が終われば行きます。
(要是 下班 (工作完了) 的 话就去。)

日本語においては、「ば」で表された仮定条件と「たら」で表された仮定条件を特に注意しない場合には、その違いを意識しなかったこともあるようである。しかし、中国語に訳したら、その違いがはっきり出てくる。例4の文と「彼に会ったらよろしくを伝えてください。(如果 见 到 他的话就代我问好。)」を対照

すると分かるように、「たら」で表
 した場合は、完了を示す「到」を欠
 かせてはいけない。「会うことが実
 現されたら（会った時に）、よろし
 く伝えてください。」という意味で
 ある。「ば」の場合は、「会うつも
 りでしたら（会うに行くなら）、よ
 ろしく伝えてください。」の意味を
 取る。また、例5と二の例11を見
 みよう。例5の「ば」で結ばれた文
 は、「仕事が終わるか終わらないか
 は分からないが、かりに終われば、
 ～」という純粹な仮定の意味である。
 これに対して、二の例11は、「二下
 了班就去。」の繼起の表現であり、
 「仕事が終わるかどうかはもう問題
 ではなく、終わったらすぐ行く」と
 いう時間的な意味が強まる。すなわ
 ち、「ば」で接続される文は、はっ
 きり仮定条件の意味が伝える。中国
 語の訳文においても、その傾向が見
 られる。例3、4、5では、仮定の
 意味強い接続表現形式が「要是（如
 果）～的话就～」の形が目立ってい
 る。

(二) 確定条件

- 6、ここまで送ってもらえば、
もうひとりで帰れる。

(把我送到了这里，我一个人就能回去。)

(三) “一～就～”の形

- 7、酒を飲めば、酔う。

(一喝酒就醉。)

- 8、太郎は机に向かえば居ねむりをはじめる。

(太郎一念书就打盹。)

- 9、雨が降れば、道がわるくなる。

(一下雨路就不好走。)

- 10、春になれば、花が咲く。

(一到春天花就开。)

「ば」と対応する“一～就～”の形は、継起の意味がほとんどなく、習慣・真理・繰り返しのことを表すのが主役である。ただし、今まで見てきたように、中国語の“一～就～”の形はいったいどんな時に継起の意味をするか、どんな時に恒常条件の意味をするかは、形式上から判断ができないものである。意味から判

断することしか方法がない。

(四) 反事实条件

11、ぼくはもっと勉強すればよかったと思うのです。

(我想 如果 再努力用点功就好了。)

12、もっと時間があればと、いつも思っている。

(我常想、如果 有更多的时间就好了。)

(五) “只要～就”の形

13、たゆむことなく努力さえすれば必ず最後の勝利を勝ち取ることができるのだ。

(只要 坚持不懈继续努力、就一定会取得最后的胜利。)

14、まじめに勉強しさえすれば、必ず中国語をマスターできる。

(只要 认真学习，就一定能够学好中文。)

15、あなたが承知さえすれば、何事も解決します。

(只要 你答应就什么都解决了。)

16、時間さえあれば、あなたと一緒にいきます。

(我 只要 有时间就跟你一起去。)

“只要～就”の形も実は仮定条件の一種である。ただし、意味においては、その条件が備えば後件の内容が容易に実現することができるという最低限度の条件を強調するので、ほかに仮定条件とは区別できない、「十分な条件」「必要唯一条件」ともいえる。基本的には日本語の「～さえ…ば～」の形と対応する。

(六) 前置き

17、専門知識について言えば、
ぼくは遠く君に及ばない。

(就专业知识来说，我远不如你。)

18、私でいえばもう10キロ歩いてもかまわないが、体の弱い人はしばらく休ませなければならぬ。

(就我来说，再走10公里也行，可是体弱的同志该休息一会儿了。)

「就」と対応する前置きの形式は、主として動作の対象や範囲を示すものである。だいたい「～について～」「～にもとづいて～」の意味を示す。「～によると～」「～によれば～」なども前置きの形でありながら、中国語では、もっとはっきりの言い方「据说～」などの表現形式があるが、「就」に訳すことができない。すなわち、「就」には「～によると～」「～によれば～」と対訳できる表現がない。だから、「就」で表す前置きの表現は、主に「ば」形式であると言えるだろうか。

四、「なら」と「就」

(一) 話題の提示

- 1、楊さんなら、そんなことを言うはずがない。

(如果 是老杨、就不会说那种话。)

- 2、スポーツなら、私がなんでもできる。

(要是 运动的话，我就什么都行。)

(二) 假定条件

3、こちらが東なら、そこらは南である。

(如果 这边是东、那边就是南。)

4、行くなら、早く準備しなさい。

(你 要是 去、就快点准备吧。)

5、ほしいなら、持って帰り給え。

(想要、你就拿回去吧。)

6、やれるなら、やってみろ。

(能做、你就做做看。)

7、行かねばならないのなら、君は行きなさい。

(不去不行的话，你就去吧。)

(三) 反事实条件

8、パパなら、助けてくれた。

(如果是爸爸的话，就来救我们了。)

「なら」形式には、筆者が第一章でのまとめによれば、上の三つの用法の以外に「情報を受ける」の表現

もある。中国語の中では、特定の場面
 でなければ、普通の仮定条件と区
 別できない。例えば、例3のよう
 に話し手自分が「かりにこちらが東
 なら」と言い出したら、また「そ
 ちらは南である」と自分の判断を
 出すときは、一般の仮定条件に取
 れる。もし、誰かが「こちらが東
 ですよ」と言ったら、話し手が「あ
 あ、そうですね。こちらが東なら、
 そちらは南である」という発言し
 たときは、情報を受ける表現と考
 えられる。もちろん、中国語に訳
 したら、同じ「如果这边是东、
 那边就是南。」になる。今まで
 見てきたように、日本語の「なら」
 のいずれの用法も中国語の「如果
 ～就～」、「要是～就～」、「～
 的话～就～」などの仮定表現に対
 応するものである。仮定表現以外
 の形式にあたることが存在するか
 どうかは、さらに調べる必要がある
 と思う。今の時点では、仮定表現
 形式に対応する例しか見当たらな
 かった。

以上、中国語の「就」と日本語
 の順接条件表現形式「と」「たら」

「ば」「なら」の対照・比較をしてきた。まとめると、下の表が示したとおりである。

		と	たら	ば	なら
如果(要是)等～就～ (如果)～的话就～ ～就～など	假定条件	○	○	○	○
	反事实条件		○	○	
既然～就～(既定条件)		○	○	○	
一～就～	恒常条件	○		○	
	継起	○	○		
只要～就～(假定条件)				○	
就～前置き				○	

上の表で分かるように、日本語の順接条件の代表的な形式「と」「たら」「ば」「なら」と中国語の「就」は、最も共通したところは假定条件にある。「就」の各意味の中で、前件が行われると、後件が短い時間に近接に起こることを表すのが基本的な意味である。すなわち、日本語の

「すぐ」に相当する働きをする。訳文から見ると、「と」と「たら」に当たるものである。

“一～就～”の形は、繼起をあらわす同時に、真理的なこと、習慣的なこと（いわば恒常条件）も意味する。これは「と」と「ば」とに対応する。この“一～就～”の形はどのような条件のもとで繼起を表すか、どんな場合に恒常条件を意味するか、中国語においては画然と分けることができない。日本語においては、「と」形式が一番向いていることが分かる。「と」「たら」「ば」のいづれも既定条件を表すことができるけれども、今回の調査では実例が少なかつた。「なら」は、仮定表現の以外には、ほかの用例が見当たらないかかった。

以上の対照研究の結果は、各論の論述と一致すると思う。ただし、本章第一節で述べたように、中国語の条件表現は、接続形式を有するものに限られていない。さらに中国語の条件表現の全般と対照しながら、条

件表現について認識して行くことが
重要な課題だと思う。

結 び

今回の研究は、主として中国人の日本語の学習者に向けて、日本語を教えるのが目的である。だから、いずれも、簡単で、分かりやすい説明を取る主旨でやっただけである。第一章では、条件表現各形式の用法について、先行研究を踏まえながら、筆者の考えでまとめ分類するものでもある。「と」形式は、前後件が時間的・心理的・客観的に近いことを意味する。これを中心にして、動作・行動の緊密性が強調された。もう一方は、習慣的・真理的なことを表すのが顕著な特徴である。この基本的な用法以外も発見の意味・仮定の意味・仕組の意味などもある。ほかの形式と比べて、どちらも、文の一体性が強い。「と」の近接的恒常的な意味が強いので、仮定の意味がわりと弱い。発見の意味においても、前件、あるいは後件に発見の意味に

当たると表現がなければ、ほかの意味になっってしまう可能性が高い。だから、日本語教育では、特に明らかにすべきだと筆者の考えである。また、「と」で接続された文の一体性が強いので、文末のムードがかなり制限されたのも事実であるが、揺れもまされに存在する。「ば」形式は、恒常な条件と仮定条件を表すのが中心的な働きである。論理性が強い。前件に重点が置かれる。「たら」形式の重点は後件にあると思われる。個別的、具体的なことを表現するのが特徴である。後件に話し手の意志が自由に表すことができる。意外性もわりと強い。「なら」形式については従来の研究が遅れているようである。前件の提出において、確定と仮定の両方とも取れるあいまいな場合があるから、先学たちの意見もかなり分かれているようである。ここでは、「なら」形式をすべて仮定表現の意味に取りたいと思う。

各形式の用法がよく理解できるのは、正しく日本語を使いこなす基礎

である。しかし、各用法の間にまったく同じ意味を表している場合もあるし、また、同じ意味を有するのにも、具体的な例においては書き換えできない場合もある。その使い分けは外国人にとつて非常に困難なところである。その原因はどこにあるのか。これでも従来の研究に注目されるところである。けれども、ほとんど後件のムードにとどまるようである。それがムードにしても、十分説明できない。この点にまだまだある。だから、筆者の調査にと経験によつて、第二章で品詞別に各形式の仮定表現について、簡単に考察を行つた。この考察では、多くのことに、先学たちが指摘された制約性の強いムードを避けたが、すべて、動詞の現在形を取つてものである。結論は第二章で掲げたとおりである。しかし、これだけでも、やはり各形式の違いを完全に説明することはできない。例えば、文末が過去形の場合とか、前件が否定形の場合とかにしたら、またどんな変化が現われるか、まだまだ検討する必要がある。

第三章では、各形式と中国語の「就」の対照研究である。日本語の条件表現と中国語の条件表現の対照研究に関する資料はまず少ないものである。あるとしても、日本語の一つの形式を中心にして（例えば「と」）、中国語との比較するものである。こういう方法は中国語を学ぶ学習者にとっては、非常に役立つことかもしれない。日本語の条件表現をあきらかにしたい人にとっては、少しもの足りないようである。日本語の順接条件表現をだいたい「と」「たら」「ば」「なら」の四つに集中したが、中国語においては、接続形式を持たないままで条件表現を表すことができる事情があるので、かなり複雑なものだと考えられる。そのなかで「と」「たら」「ば」「なら」ともに広く関連ができるのが「就」ではないかと思われる。だから、「就」を中心にして、四つの形式にわたって一通り考察した。その結果はだいたい各論の結論と一致するものである。

以上は、本論文の各章の内容をまとめものである。どちらも不十分なものである。特に第二章と第三章はいずれもその範疇の一部分であり、今後さらに広く、詳しく検討しなければならないと強く感じている。

また、本論文を書くつもりになったときは、用例について、週刊誌や、小説や、新聞などから資料を収集したかったが、実際の作業に入ったら、いま社会に起こったことに関するものが多いので、この社会で生活していない外国人にとってはその背景、内容を分かただけでも、かなり難しいことである。個人の小説にこだわったら、一般性が薄いので、外国人の日本語の条件表現の全般を分かりたいという要望に満足しにくい。だから、筆者はできるだけ、日常生活用語の用例を採用したものである。中には従来文献と重複した用例がある。そのゆえに、新しい意見が出にくい恐れがある。今後は、資料の収集について、もっと工夫する必

要である

この論文は、中国人の学習者に向けてのものなので、主に中国人にとって分かりやすいように説明してきた。中には、日本人にとって分かりにくいところや、誤解したところが多いので、ご指導のほどを期待したい。

最後に、筆者は一留学生として、女学院大学の三年間の勉学生活の中で、終始生活の面において熱心にお世話くださり、学問の面において丁寧にご指導をいただいた柏本雄幸教授に心から深く感謝を申し上げます。

注

- 1 文献47はしがき、文献51 p 221を参照のこと
- 2 文献40 p 2を参照のこと
- 3 注2に同じ p 14を参照のこと
- 4 その論文はハルビン師範大学出版された《函授教育》
(1994年5月)に載った。
- 5 文献11 p 99を参照のこと
- 6 文献16 p 92を参照のこと
- 7 注6に同じ p 93を参照のこと
- 8 注6に同じ p 96を参照のこと
- 9 川口さち子(1984)仮定性がない。江田すみれ(1991)仮定性がある。
- 10 文献34 p 158を参照のこと
- 11 文献14をを参照のこと
- 12 文献9、18、40、60などを参照のこと
- 13 文献27 p 2を参照のこと
- 14 文献13 p 356を参照のこと
- 15 注5に同じ p 194を参照のこと
- 16 注2に同じ p 170を参照のこと
- 17 注13に同じ p 4を参照のこと
- 18 文献 p 82を参照のこと
- 19 文献39 p 226を参照のこと
- 20 注12に同じ
- 21 文献18 p 66特に「たら」「れば」「と」を示した。
- 22 注21に同じ p 67 前件をP, 後件をQで表す。
- 23 注2に同じ p 3
- 24 注2に同じ p 6
- 25 文献54 p 91
- 26 注25に同じ p 103
- 27 注25に同じ p 98

- 28 注 2 に同じ p 1 0
- 29 文献 10 p 1 4 7、注 6 に同じ p 8 6
- 30 形容動詞を「な形容詞」か「形容詞Ⅱ」と呼ぶこともある。
- 31 文献 12によると、「感情」とは主観的な感覚、感情の表現をなす。これに従えば、「痛い」「寒い」など「シク活用」ではない形容詞も中に入るのも必然である。
- 32 文献 12によると、「属性」とは客観的な性質、状態の表現をなす。これに従えば、「甚だしい」など「シク活用」形容詞も中に入るべきである。
- 33 アスペクトによる動詞の分類の中、状態の変化を表す動詞は、継続動詞と瞬間動詞の二種類がある。状態の一時的変化を表す動詞は、継続動詞であり、状態の永続的变化を表す動詞は、瞬間動詞（または結果動詞）である。継続動詞と瞬間動詞の見分けは次のとおりである。
- 書く→書いている→書いた
死ぬ→死んだ→死んでいる
- 34 文献 27 p 8 を参照のこと。中の例文は「写真を撮るならカメラを貸してあげよう。（A = 写真を撮る B = カメラを貸す）」を挙げた。
- 35 文献 50 p 88 を参照のこと
- 36 文献 55、56、59 を参考したものである

参考文献

1. 佐久間 鼎著 『現代日本語法の研究』 厚生閣／くろしお出版 1940年
2. 木之下正雄著 「仮定条件法について」 『国語国文』 13-5 1943年
3. 岡本 禹一編 『日本語表現文典』 財団法人国際文化振興會 昭和19年
4. 三上 章 著 『現代語法序説—シンタクスの試み—』 刀江書店／くろしお出版 1953年
5. 三上 章 著 『現代語法新説』 刀江書店／くろしお出版 1955年
6. 三上 章 著 『象は鼻が長い』 くろ しお出版 1960年
7. 三上 章 著 『日本語の構文』 くろ しお出版 1963年
8. 三尾 砂 著 『話ことばの文法』 法政 大学出版社 1958年
9. 北條 淳子著 「条件の表し方」 『日本語 教育』 4, 5 1964年
10. 国立国語研究所報告25 『現代雑誌九十種の用語用字（3）分析』 秀英出版 1964年
11. 国立国語研究所報告 3 『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』 秀英出版 昭和39年
12. 国立国語研究所報告44 『形容詞の意味・用法の記述的研究』 秀英出版 昭和47年
13. 鈴木 重幸著 『日本語文法・形態論』 麦書房 昭和47年
14. 豊田 豊子著 「「と」と「～とき」（時）」 『日 本語教育』 1977年
15. 鈴木 忍 著 『教師用日本語教育ハンドブック3 文法Ⅰ助詞の諸問題』 凡人社 1978年
16. 豊田 豊子著 「発見の「と」」 『日本語 教育』 36 1979年

17. 竹島 金吾著 『中文課本基礎編』 金星堂 1979年
18. 寺村 秀夫著 『日本語の文法 (下)』 大蔵 省印刷局 昭和56年
19. 小野米一・依、璽維著 「条件表現『と』『ば』『たら』『なら』の異同について
中国人学習者のために」 『北海道教育大学紀要』1-A34-1 1983年
20. 川口さち子著 「ト・バ・タラ・ナラによる条件表現の分析 日本語初級教科
書における提出順序再考」 『早大語学教育研究所紀要』28 1984年
21. 高橋 太郎著 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』 秀英出版 1985年
22. 田中 寛 著 「条件表現における提題化機能」 『日本語教育』57 1985年
23. 豊田 豊子著 「『と、ば、なら、たら』の用法の調査とその結 果」
『日本語教育』56 1985年
24. 蓮沼 昭子著 「ナラとトスレバ」 『日本語教育』65 1985年
25. 『日中辞典』 小学館 1987年
26. 蓮沼 昭子著 「条件文における日常的推論—『テハ』と『バ』の選択要
因をめぐって—」 『国語 学』150 1987年
27. 横林宙世・下村彰 子著『接続表現』 外国人のための日本語例文問題シリ ーズ6
荒竹出版 1988年
28. 町田 健 著 『日本語の時制とアスペクト』 アルク 1989年
29. 益岡 隆志著 『基礎日本語文法』 くろしお出版 1989年
30. 吉川 武時著 『日本語文法入門』 アルク 1989年

- 141
31. 森田良行・松木正 恵著 『日本語表現文型』 アルク 1989年
 32. 稲葉 みどり著 「日本語条件文の意味領域と中間言語構成—英語話者の第二言語習得過程を中心に—」 『日本語教育』 75 1991 年
 33. 小林 賢次著 「条件表現の歴史」 『講座日本語と日本語教育題10巻』 『日本語の 歴史』 明治書院 1991年
 34. 江田すみれ著 「複合辞による条件表現Ⅰ『となると』の意味と機能」 『日本語教育』 75 1991年
 35. 劉月華他 著 『現在中国語文法総覧』(下) くろしお出版 1991年
 36. 江田すみれ著 「複合辞による条件表現Ⅱ『と』『とすると』『となると』の意味と機能について—」 『日本語教育』 78 1992 年
 37. 三原 健一著 『時制解釈と統語現象』 くろしお出版 1992年
 38. 東京YMCA日本語学校編 『入門日本語教授法』 創拓社 1992年
 39. 富田 隆行著 『教授法マニュアル70例①』 凡人社 1993年
 40. 益岡 隆志編 『日本語の条件表現』 くろ しお出版 1993年
 41. 上野 恵司著 『NHK新中国語入門』 日本放送 出版協会 平成7年
 42. 山梨 正明著 『条件文の表現機能と言葉の認識』 日本語学 1994年
 43. 中島 悦子著 『日中条件現の対照』—とを中心として— 日本語学 1994年
 44. 田中 寛 著 『条件表現と基本文型』 日本語学 1994年
 45. 鈴木 義和著 『一バ／ト／タラ／ナラ』 日本語学 1994年
 46. 朱 徳熙 著 『文法講義—朱徳熙教授の中国語文法要説—』 白帝社 1995年

47. 小林 賢次著 『日本語条件表現史の研究』 有限会社ひつじ書房 1996年
48. 山口 堯二著 『日本語接続法史論』 有限会社和泉書院 1996年
49. 内藤 正子著 『中国語研究 ことばの性相』 白帝社 1997年
50. 大河内康憲著 『中国語の諸相』 白帝社 1997年
51. 小池清治等編 『日本語学キーワード事典』 朝倉書店 1997年
52. 日中友好協会 『国語へのちかみち』 朝日 出版社 1997年
53. 香坂 順一編 『日本語から中国語へ』 光生館 1998年
54. 芳川武時等著 『日本語教師養成講座』 B-3日本語の文法 (3)
55. 中国社会科学院语言研究所词典编辑 室 『现代汉语词典』 商务印书馆 1980年
56. 吕 叔湘 主编 『现代汉语八百词』 商务印书馆 1981年
57. 北京大学東語系日語教研室 『日本語』 第一冊 北京大学出版社 1986年
58. 王 日和 編 『日语语法』 商务印书馆 1989年
59. 尚 水清 主编 『新汉日词典』 中国商 务印书馆&日本小学馆 1991年
60. 张 麟声 著 『汉日语言对比研究』 北京大学出版社 1993年